バカとゲームと召喚獣

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとゲームと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ２９８８Ｔ

【作者名】
唐笠

【あらすじ】
これは文月学園に在学しているバカとその仲間達（一部、才女、神童、秀吉）が織り成す一風変わった物語である。
ぶっちゃけた話、文月学園はほとんど関係ない。
だってＲＰＧだから…
それでも、恋愛模様は繰り広げられる。
だってＲＰＧにだってＣＰは存在するから…
そんなこんなで始まる、『確実に原作には沿わない』バカテス物語！
明久「沿わないんじゃなくて、沿う気もないよね…」

プロローグ

この話は文月学園に在学しているバカとその仲間達（一部、神童・才女・秀吉）が織りなす一風変わった物語である。
ぶっちゃけて言えば、ＲＰＧ要素満載で文月学園自体あまり関係はない物語なのだ！
だってＲＰＧだから・・・
でも、恋愛模様は繰り広げられたりはする。
ＲＰＧでもＣＰは存在するからね。
※更新はあまり早くはありませんが、気長に待っていただけたらと思います。
上記の内容でも良いという寛大な方は是非お楽しみください。

ジリリリリリ！！

バシッ！

朝早くからけたたましく仕事を続ける、時を司るものを僕こと吉井明久は止める。

時刻は６：３０

朝の身支度をして学校にいくには丁度いい時間だ。

「よーし、今日一日頑張るぞー！」

なぜ朝からこんな威勢のよい声を出しているかというと、明日から

夏休みだからだ！

夏休み、それは学生に与えられたオアシス。

家でゆっくりでき、友人と遊び、むさ苦しい鉄人や妖怪ババアの顔を見ないで済む、魅惑の一ヶ月半なのだ

そんな素晴らしい夏休みを今すぐにでも手に入れるため、僕は朝食（水道水）を済ませ、学校へ向かった。

夏休みは何をしようか？

みんなで集まって近場で遊ぶのはもちろんのこと、まだクリアしていないゲームをやるのもいいだろうし、明後日発売する新作ゲームも見逃せない、海に遊びに行くのだっていいかもしれない（お金無いけど…）

そんなふうに、夏休みに想いをはせながら登校していると、前方に見知った姿があった。

長くのび、それでいてふんわりとした感じを持たせる桜色の髪、どこか護ってあげたくなるようなおしとやかな歩き方と雰囲気。

「姫路さん、おはよー」

僕は走って後ろから声をかけた。

いやぁ、朝から姫路さんに会えるなんて今日はついてるなぁ…

「あっ、明久君！？おっ、おはようございます！」

なぜだか知らないけど、姫路さんは凄く焦っているようだった。

何か考え事でもしてたのだろうか？

「明久君・・・・・・・・
あの・・・」

そんなことを考えていると姫路さんが話しかけてきた。

「どうしたの、姫路さん？」
「あのですね・・・
明久君は明後日・・・
お暇だったりしますか？」

明後日か・・・
明後日といえば新作ゲームの発売日だけど、それ以外の予定はなかったはずだ。

「うん、ゲームを買いに行った後はやることもないから暇だよ」

「なっ、なら・・・
私と・・・・その・・・・」

姫路さんは可愛らしくもじもじしながら鞄から何かのチケットのような物を取り出した。

「明久君、よかったら明後日の・・・
夕方にやるおま―」

「よう！明久に姫路！！」

「ひゃぅ！？さっ、坂本君！？」

「って、雄二！話してる最中に割り込まないでよ！！」

「あぁ、すまないな。まぁ、俺は気にせず続きをやってくれ」

突如僕達の後ろから現れた雄二によって僕達の話は中断させられてしまった。

しかし、雄二もなんて無神経なやつなんだ。

人が話してる時に割り込むなんて嫌がらせとしか思えない。

そう思って雄二の方を睨むと『お前だけ幸せになろうたってそうはさせねぇ』と目で訴えてきた。

「ちくしょー、雄二のバカ野郎ぉぉぉぉ！！」

姫路さんとの会話という僕の貴重な癒しの時間を奪った雄二にせめてもの反抗として、ありったけの声で叫んだ。

っと、そんなことをしている場合じゃなかった。

雄二みたいなブサイクを相手にしているよりも、僕の癒しの時を取り返さなければ。

「姫路さん、ごめんね。で、明後日どうしたの？」

「あの・・・明久君」

「ん、なに？」

「後ろの坂本君が・・・」
姫路さんがやけに心配そうに言うので後ろを見る。
そこには・・・
「どうしたの雄二？そんな怖い顔してるともともとのブサイクが更にひどいよ？」
「明久、てめぇ・・・
人をバカよばわりした後に無視して挙げ句の果てには、ブサイクよばわりとはいい度胸じゃねぇか！？」
ヤバい、雄二が本格的に怒ってた・・・
しかし、言いがかりにも程がある。
確かに僕が悪い部分もあったかもしれないけど、僕の癒しの時間潰したのは雄二だ。
むしろ、こちらが怒りたいくらいだ。
しかし、まあ理性的な話はおいといて・・・
今の雄二はかなりやばそうだった。
多分捕まったら異端審問会と同等の仕打ちを一人でやってのけるだろう。
こうなったら取る道は一つしかない。
「姫路さん、逃げるよ！」
「あっ、明久君！？」

僕は姫路さんの手をとって逃げ出した。
恥ずかしいけど、今はそんなことをきにしている場合じゃない。
姫路さんを置いていって、万が一何かあってからじゃ取り返しがつかなくなるからだ。

「まぁてぇぇぇー
あきひさぁぁぁーー！！」

後ろから雄二が追いかけてくるが、幸い学校はすぐ近くだ。
いくら雄二が相手でも逃げ切れるだろう。

こうして僕の運命の一日は幸せと不幸の間で始まったのだった。

プロローグ（後書き）

～後書き～

始まりましたバカとゲームと召喚獣。

明久「って言っても、まだゲームの部分なにも出てないよね」

まあ、プロローグだしね。

明久「ほんとに大丈夫なの？」

なにが？

明久「だって、まだゲームの世界観はおろか、敵キャラすらほとんど決まってないんでしょ？」

アハハハ・・・

明久「ねぇ、ほんとに大丈夫だよね？」

多分大丈夫だと思います。

一応、ゲームを手に入れるまでは決まってるから。

明久「要はそこしか決まってないって言いなよ・・・」

まぁまぁ、なんとかなるって。

明久「不安要素しかないよ・・・」

こんな作者ですが次回もお楽しみに

第一話

「ハァハァ……
やっと着いた…」

息も切れ切れながら、僕と姫路さんは教室の前まで着いたのだった。
途中、僕達が渡った瞬間、信号が赤になってくれたのでなんとか僕達二人は逃げおうせたのだ。

「朝から走らせちゃってごめんね、大丈夫姫路さん？」

「ハァ…ハァ…
いえ、私は大丈夫ですよ」

言葉では大丈夫と言っているがやっぱり辛そうだ。
体の弱い姫路さんにとって朝からの猛ダッシュは正直応えただろう。
僕はそんな姫路さんを早く休ませてあげたくて、教室の扉を開ける。

「ハァハァ…
みんなおはよ…」

「ハァ…ハァ…
みなさんおはようございます…」

「「「……」」」

しばらくの沈黙…

あれ、なにかおかしいかな…？

今の状況を整理してみよう。

1．朝、二人の男女が揃って登校

2．二人は息がかなり荒い

3．そしてここはＦクラス。異端審問会の巣窟！？

ヤバい！！と思って扉を閉めた瞬間、扉に無数の何かが突き刺さる音。

いつものことながら彼らはモラルが決定的に足りないようだ。

「どうしようか、姫路さん？」

「どうしましょうね、明久君？」

困った…

今、教室に入ればおそらく生きて帰れないだろう。

それに異端審問会の面子がいつまでも待ち伏せているとは限らない。

早く打開策をうたなければ姫路さんまで巻き込んでしまう。

そうこう立ち往生していると、向こうから雄二がやって来るのが見えた。

まずい…

教室に入れば刃物の嵐にさいまみれ、入らなければ雄二に捕まる。

僕にいきる道はないのだろうか？

「明久ぁぁぁーーー！！」

なんて大声をあげてやってくるのだろう…

まるで避けられない恐怖から逃げようと必死に逃げている人みたい

だ。

逃げる…？

「明久ぁぁぁーーーー
助けてくれぇー！！」

僕の疑問は確信へと変わった。
どうやら雄二は逃げているようだ。
相手は十中八九霧島さんだろう。
理由はどうあれ好都合だ。
雄二には犠牲になってもらおう。

「雄二ーー！！
こっちだよ、早く教室に入って！！」

「明久、恩にきる」

そう言って、雄二はなんの疑いもなく教室へ入っていった。
ほんと霧島さん関連になると冷静さを失うなぁ…
まぁ、今回はそれがありがたいんだけど。
なんてことを考えていると霧島さんがこちらにやって来た。

「……瑞希、吉井、雄二見なかった？」

「えっと、ですね…」

霧島さんの質問に姫路さんがどうしようかと目で訴えてきた。

「雄二なら今さっき教室に入っていったよ」

「……ありがと、吉井」

そう言って霧島さんは教室に入っていった。

「明久君、良かったんですか坂本君を裏切るようなことして？」

「大丈夫だよ。雄二の安全より霧島さんの幸せの方が大事だしね」

雄二には確かに悪かったかもしれないが、今回は心を鬼にしよう。

今の僕にはやるべきことがあるのだから。

そう、僕のやるべきことは…

教室の扉を開けて叫ぶ

「みんなーーー、雄二が朝から霧島さんといちゃついてるよー！」

「「「今から異端審問会を始める」」」

「どわぁー、やめろー！？」

雄二が叫びながら教室を飛び出していった。

その後には霧島さんと異端審問会のみんなが続く。

「じゃっ、姫路さん入ろっか？」

「あのぅ…

坂本君のことは…？」

「あれはしょうがなかったんだ、姫路さん。必要な犠牲だったんだ

よ」

そうだ、何かを得るには何かを失わなきゃいけないんだ…

僕は渋る姫路さんを説得して教室に入った。

第二話

キーンコーンカーンコーン♪

授業を告げるチャイムが鳴る。
あれから難を逃れた僕たちは、教室にいた美波と秀吉と共に授業の始まる時間までのんびりとしてたのだ。
さすがにＦＦＦ団が帰ってくる前はトイレに逃げ込んだけど…

「全員、席につけ！」

今日もむさ苦しさ全開の鉄人がやってきた。
まぁ、この顔も今日を機に１ヶ月半見納めだと思えば悪くない。

「貴様等も分かっているとおり明日からは夏休みだ。しかし、夏休みは遊ぶための時間じゃないぞ。各々勉学に励み、その後遊ぶように」

「「「はーい」」」

Ｆクラス男子勢は形だけの返事をしておく。
せっかくの夏休みだ、勉強に使うなんてもったなすぎる。

「言い忘れていたが、吉井に坂本、学園長がお呼びだ。至急学園長室まで行くように」

「「はい！？」」

雄二と僕の声が綺麗にハモる。

「雄二どう思う？」

「どうもこうもあるか。どうせまた厄介事押しつける気なんだろうよ」

はぁ～

思わずため息がでてしまう。

せっかくの夏休みを前にして妖怪ババアの厄介事に巻き込まれるなんて真っ平ごめんだ。

コンコンッ

「入りな」

しわがれた老婆の声が部屋の中から響く。

「邪魔するぜババア」

「失礼します妖怪ババア」

「あんたら退学にしてやろうか？」

「雄二のせいで妖怪ババアが機嫌悪くしたよ」

「いや、妖怪クソババアが怒ってんのはお前のせいだろ」

「分かってないなぁ、いくら大妖怪クソババアといえども、雄二みたいなブサイク見たら機嫌悪くするよ」

「明久、分かってないのはお前だ。お前みたいな稀代のバカを見たらいくら物の怪大将・大妖怪クソババアでも気分害するだろ」

「あんたらいい加減にしなよ！！」

全くだ。

確かに僕は人より少し学力が足りないかもしれないが、顔も性格も並程度もない雄二に言われたくない。

「あっ、学園長すいません。このバカには後で言い聞かせておきますので。」

「坂本、あんたも十分悪いよ！」

「はいはい。それよりいいんすか学園長？俺たちを呼んだのは理由があるんだろ？」

そうだった。

僕達はこのクソババアの厄介事に巻き込まれに来たんだった。

「はぁ…まぁ、あんたらのこれは今に始まった事じゃないしいいさね。

で、本題だがあんたら西村先生の補習とゲームのテストプレイって言ったらどっちがいい？」

「それはもちろんゲームに決まってるじゃないですか」

比べるまでもないだろう。
むせ返るような暑さ中、むさ苦しい鉄人とやる補習と、家でゆうゆうとやるゲーム。
これが姫路さんとの個人レッスンだったら話は別だけどね。

「なにを企んでる？」

雄二が怪訝そうな声で訪ねる。

「なにさ、坂本はゲームのテストプレイより西村先生との補習の方がいいのかい？」

「なにもそんなわけじゃない。ただ、この話であんたのメリットが分からない。それに俺たちになんのゲームをやらせる気だ？」

確かにそうだ。
ここ文月学園は進学校。
なによりも学力を重視しなきゃいけないのに、補習の代わりにゲームのテストプレイとはおかしな話だ。

「ったく、可愛くないねえ。と、言ってもちゃんと理由があっての事さね」

「「理由…？」」

僕ら二人は頭の上に？を浮かべる。

「知っての通り、あんたらFクラスは最低クラスでありながらBクラスまで倒し、Aクラスにも後一歩まで迫った。

でもね、教育者としてそれは困るんだよ。このままじゃ、いずれ学力が無くても上の設備が手に入ると勘違いするバカ共が増えちまう。それで考案したのがこのゲームさね。」

「でも、ゲームなんかやったら余計学力が落ちるんじゃないですか？」

僕は一般論を述べる。

まぁ、ゲームが学力低下に直結する訳じゃなくて、のめり込みすぎて勉強時間が減るだけだけどね。

「はん、普通のゲームなわけないだろ。もちろんテストの点数を使ってのゲームさね」

「でもそれだと試験召喚戦争と何が違うんだ？」

雄二が首を傾げる。

「色々と違うけど、大きな違いがゲームクリアになったとってことさ。

それにこれは試験召喚戦争よりもあることが必要になるからね」

あることとは何か気になるが、それじゃ本格的にただのゲームではないだろうか？

そんな疑問を抱くが、せっかくのチャンスを無駄にする程僕もバカじゃない。

「で、やるのかやらないのか今すぐ決めな」

「「やります」」

結局、不明点も多いまま僕たちはこの奇妙な頼み事を引き受けたのだった。

「さぁて、あいつらは私の最大の目的を果たしてくれるかねぇ」

学園長は一人呟くのだった。

第二話（後書き）

～後書き～

次回でいよいよ明久達がゲームを始めます

明久「やっとだよね。そういえばどういうゲームなの？」

詳しい事を言うとネタバレになるから言わないけど、ＲＰＧであることは確かだよ

明久「タグにもＲＰＧってあるしね…
あわやタグ詐欺になるかと思ったよ」

失敬な

明久「いや、事実だからね」

ムムムッ
言い返せない…

明久「はぁ…
こんな作者ですいません」

すいませんでした…

では、次回からいよいよ本題なのでお楽しみに

第三話　ゲームスタート！！

家に帰った僕は早速、学園長から貰った小包みを開けてみる。
中には室内で使う小型プラネタリウムのような丸い機械と説明書が入っていた。

『以下のことに留意してプレイするように。
1，このゲームは試験召喚獣を使います
2，左上のＨＰバーが０になった場合、戦死となり補習室送りとなる
3，プレイヤーのステータスはテストの点数・ゲーム内の職業・各々の性格、素行を加味して算出される
4，決戦を申し込まず、他プレイヤーに襲撃を掛けた場合はＰＫ（プレイヤーキラー）として扱われる
5，不当なＰＫを行った場合、それ相応の処分をするので注意すること
6，アイテムの売買はプレイヤー同士で行ってもよい
7，仮装空間とはいえモラルを持って行動するように
8，このゲームの目的は各島にいるボスを撃破してＶＣ（ヴィジョンコイン）を集めることである』
ＰＫの事がルールブックに書いてあるということは、多人数同時プレイ形式なのかな？
僕はそんな疑問を持ちながら本体のスイッチをＯＮにした。

ヴィーン…

そういう機械的な音と共に『Ｎｅｗ　Ｇａｍｅ』と『Ｃｏｎｔｉｎｕｅ』の文字が現れた。
もちろん僕は今回が初めてなので『Ｎｅｗ　Ｇａｍｅ』を選択する。

すると突然、僕の部屋が街の景色に変わった。
それと同時に僕の姿も召喚獣の姿に変わる。
見回すとそこにはＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラ）と思われる町民（全員デフォルメ）、活気に賑わう露店、更に大きな門が見えた。
おそらくここから冒険に出るのだろう。残念ながら今は閉まっているが…

「まずはステータス確認だよね」

街の中とはいえ、いつ戦闘になるか分からないし、ステータスも気になるのでメニュー画面からステータスを選ぶ。

～吉井明久～

職業　剣士
Ｈ　Ｐ　１００
Ｓ　Ｐ　５０
攻撃力　３５
防御力　２０
素早さ　４０
知　力　３
機動力　７５

Ｅ　ストライカーシグマ５
Ｅ　突功服

「なんで武器がストライカーシグマ５なんだよぉぉぉーーー！？」

僕は思わず叫んでしまった。

おかしい、ストライカーシグマ５といえばただの鉛筆の筈だ…
しかもこのストライカーシグマ５は先が尖ってもない…
これでは、とてもじゃないが魔物など倒せないよ…
そもそもいつもの木刀はどこにいってしまったのだろうか…？

しかし、いつまでも悩んでいても僕は情報収集しようと思い、街をふらつくことにした。

３０分後、僕は情報収集を終えた。
情報をまとめると、あの門はやはり冒険に行くための入り口である。
そして、その門は二人以上のパーティーを組んでいないと入れない。
ここでは現実とほぼ同じで、空腹になったり疲れたりする。
素材などを使ってアイテムを生成してくれる店がある。
街ではたまにイベントを行うということだ。

何はともあれ二人以上いなければ冒険に行けないので戻ろうとメニュー画面を開く。
と、そこで建物と建物の間にある横道を見つけた。
僕は気になり、メニュー画面を閉じ横道に入っていく。
横道はあまり長くなく、数分で開けた場所についた。
そこは街を一望できる高台で、ちょうど下から死角になっている隠れ家的スポットだった。

しばらく見とれていた僕だが、近くに旗のマークがあったので近付いてみた。
そしてそれに触れると、旗のマークははじけとび『吉井明久がＡ－１のフラッグを回収しました』とメッセージが表示された。
いったいフラッグってなんだろう？
そんな疑問を抱くが、気にしても仕方ないので、雄二を呼びに行くため、ゲーム終了を選択した。

途端に街並みは消え、いつもの僕の部屋へと戻る。
早速、携帯で雄二に電話を入れる。

プルルル…

「どうした、明久？」

「あっ、雄二はもうあのゲームやった？」

「まだだが明久はやったのか？」

「うん、やってみたけどすごいんだよ。街並みとかきれいというか、すごいリアルだったよ！」

「そいつはすげえなぁ。俺も今からやってみるか」

「うん、じゃあ僕も再開するね」

そういって僕は電話を切って、もう一度スイッチをＯＮにした。
それが長い旅路の第一歩となることも知らずに…

第三話　ゲームスタート！！（後書き）

～後書き～

ついにゲームが始まりました！
これから明久達はどのような物語に巻き込まれていくのかお楽しみ下さい。
ゲームの大まか話は決まりましたが、細部が決まっていないので何かアイデアをいただけると嬉しいです。
魔物、アイテム、オリキャラ等なんでもオッケーなのでよろしくお願いします

第四話　始まりの島ルナ

『Ｃｏｎｔｉｎｕｅ』を選ぶと、また部屋の中と僕の姿が変わる。ほぼ同時に雄二もログインしてきたらしく、少し離れた場所に雄二の召喚獣が現れる。

「おーい、雄二ー！」

僕は手を振り雄二に近づいた。雄二もこちらに気がついたらしく手を降っている。

「よお、明久。にしてもすげえなぁ…まるで本当の街みたいじゃねえか。上に長いことを考えると中世のバチカンあたりがモデルか？」

「どうなんだろうね？」

正直いって、僕は歴史はある程度分かるが、そんな豆知識みたいなことは分からないし…

「それより雄二、早く冒険に行こうよ。あっちの門から行けるからさ」

僕は雄二にバカにされる前に話題を切り替える。

「こんな所にいるのもなんだから行くとするか」

僕たち二人は門の前まで行くのだが…

「閉まってる…」

「なんで閉まってんだ？」

「おかしいなぁ…
二人以上でパーティー組めば開く筈なんだけど」

「そんなルールがあるのか？」

おそらく雄二の事だから説明書すら読んでいないのだろう。
もっともこの情報は説明書ではなく街で手に入れたものだけどね

「うん。パーティーが二人以上じゃなきゃ門が開かない設定になってるらしいんだよ」

「ってことは、俺たちはパーティーとして認識されてないんじゃないか？」

確かにそれはありえる…

「っと、見つかったぞ明久。」

「なにが…？」

見つかったと言われても雄二の周りには何もない…

「なにがって、パーティー編成コマンドを見つけたんだ。こっちを見ろ！」

「って言っても僕には何も見えないんだけど…」
雄二の指を指してる場所には、僕からは何も見えない。
ただ、街の風景が映っているだけだ。
「ったく、勝手にパーティー組んどくぞ」
雄二がそういうと僕の目の前に『坂本雄二からパーティー編成の申請がきました。同意しますか？』というメッセージが現れた。
僕は『ＹＥＳ』を選択する。
すると突然、雄二のメニュー画面が僕の目の前にも現れた。
「どうやらパーティーを組むと相手の情報が表示されるらしいな」
雄二がこちらを見て呟く。
僕も雄二の方に視線を戻すと『坂本雄二　ＨＰ１２０』と表示されていた。
なるほど、仲間内でだけこういった情報を確認できるのか。
「そうだ雄二もステータス確認しておきなよ」
「そうだな」
雄二はそう言ってメニュー画面からステータスを選択した。
今回は見える。やはりパーティーを組んでいるからだろう。
～坂本雄二～

職業　翔子の婿（笑）
Ｈ　Ｐ　１２０
Ｓ　Ｐ　４５
攻撃力　７５
防御力　５０
素早さ　３５
知　力　４５
機動力　３０

Ｅ　メリケンサック
Ｅ　突功服

「なんで職業が翔子の婿なんだよーーー！！」

雄二が叫び声をあげる。
まさかシステムにまで認知されてるなんて、流石の雄二もびっくりだろうね…
雄二もいい過激、正直になればこの状況を素直に喜べるのに、いったい霧島さんのなにが不満なんだろうか？

それにしても地味に僕の１５倍も知力があるなんて…
それもシステムがそう認識したのかな…？
だとしたらすごい敗北感が…

「まあ、雄二早く冒険に行こうよ」

「違う、違う…
俺は翔子の婿なんかじゃねぇ。システムの野郎、人の不幸を笑いやがって…」

僕の誘いは全くと言う程聞こえてないようだ。
このままではラチがあかないので、僕は雄二を引っ張って門まで行った。

『行き先を決定してください』

とメッセージが出てきたが行ける場所は一つしか表示されてないし、それを選ぶ事にした。

『始まりの島ルナに決定しました』

そうメッセージが出た途端、僕たちは門に吸い込まれた。

「っつ！！」

まるで体が裂ける程の凄い痛みだ。
ワープにかかる負荷が原因なんだろうか？
だとしたら学園長に申請しとかないといけないな。
僕たちみたいな男はまだしも、姫路さんみたいな体が弱い人には相当こたえるだろうし。

物思いにふけっていると突然、光が輝きを増した。
僕は思わず目をつぶった。

数秒後、目を開けた僕たちの目の前には広大な高原広がっており、

遥か遠方に祠が見えた。

「っつ、着いたみたいだな」

雄二も痛みで意識が戻ってきたようだ。

「そうだね。でもなにをすればいいんだろう？」

「とりあえず、あの祠に向かって歩けばいいんじゃないか？」

「そうだね。ボスがいるならそこだろうし」

歩き始める僕と雄二。

数歩歩いたところで一匹のモンスターが現れた。

見た目はネズミを3倍程に大きくしたようなやつだ。

ただ、ネズミとは違い目付きは獲物を狙う獣のものだ。

僕と雄二はお互いに獲物を構える。

緊張した空気が場に流れる…

「なあ、明久」

雄二が神妙な面持ちでたずねてくる。

「なに、雄二」

僕も敵と目を離さず、雄二に返事をする。

「なんでお前の武器は鉛筆なんだよぉぉぉーーー！？」

「何も僕だって好きで選んだ訳じゃないよ！！初めからそうだった

んだから仕方ないでしょ！！」

「んなもんで勝てるかよ！」

「案外強いかもしれないじゃ、っと」

僕は攻撃の気配を感じ、バックステップでかわす。
ステータスの機動力の高さゆえか身軽に避けることができた。
どうやら敵は僕たちが口論してる間に間合いを詰めてきたようだ。

「雄二、今は目の前の敵に集中しよう！」

「ったく、しょうがねえな。後で買い換えろよ」

再度僕たちは敵に向き直る。

相手も警戒しているらしく中々攻めてこない。
攻めてこないなら…

僕は敵に向かって一直線に突っ込んでいく。
敵も向かい打つべく体勢を整えている。

敵の目の前にまで迫った僕は武器を上段に振りかざした。
しかし相手の防御の方が一足早い。このままじゃ、確実に防がれる。

そう判断した僕は横合いに回り、サイドからの攻撃を決めた。
予期せぬ方向からの攻撃に敵は体勢を崩している。

「雄二、今だ！！」

僕の掛け声を受けて雄二が真っ正面から敵に突っ込んでいく。
単調な攻撃、それは相手にとっては最も防ぎやすい攻撃。
しかし防ぐことができなければ単調さゆえの純粋な力をくらうことになる。
そしてネズミに似たモンスターはその攻撃を真っ正面から受け、霧散した。

「どうやら勝ったみたいだね」

「やったな、明久」

お互いにグーでお互いの手をつく僕たちの前にメッセージが現れた。

『スキルポイントを振り分けてください』

スキルポイントの振り分けとはレベルアップみたいなもので、様々カテゴリーから自分なりにスキルポイントを振り分けてカスタマイズしていくものだ。

「雄二は攻撃系のスキルに振り分けてよ。僕は探索に振り分けるからさ」

「まあ、俺の方が攻撃力高いし、そうしておくか」

探索スキルとは隠れている敵や宝箱等を見つけやすくしたりする主に情報アドバンテージを重視するスキルだ。
当然、そういうキャラには機動力が必要となる。
そして僕は雄二に比べて機動力が高い。

なら、探索スキル等を上げてサポートにまわった方が得策な筈だ。
念のため、攻撃系のスキルにもスキル振り分けはしておくけど。

「じゃあ、行こうか」

「おう！」

スキルポイントを振り分け終わった僕たちは、再度祠を目指して歩き始めた。

「結構古い祠だね」

祠の前まで着いた僕は呟く。
祠までの道のりは思ったほど長くなく、案外簡単に着いたのだ。
途中、何度かモンスターと闘ったりもしたが、特に強敵もおらず、僕たちの冒険は順調そのものだった。

「明久先に入ってるぞ」

気づくと雄二はもう祠の中に入っていってしまっていた。

「雄二待ってよー」

僕も雄二を追いかけて祠に入ろうとするが、一瞬何かがあることをしめすリングが祠の奥に表示された。
このリングは探索スキルによるものらしく黄色は宝箱、赤は敵、青はトラップ、緑はパーティーではないプレイヤーと分類されている。
そして今回のリングの色は緑だ。

「雄二止まって！」

「どうした明久？」

雄二がこちらに振り返りながらこたえる。

「今、祠の奥にパーティーじゃないプレイヤーを表す緑のリングが見えたんだ」

「はぁ？俺たちしかこのゲーム持ってないんだから、パーティーじゃないプレイヤーなんかいるわけないだろ」

確かにそうだ。
ということはシステムのミスか仕様だろうか？
いくら探索スキルを上げていても、まだまだ初級レベルだからそういう仕様もあるだろうしね。

「ごめん雄二、まだ探索スキルが低いから見間違える仕様みたい」

「そうか、なら先を急ぐぞ」

そう言って、奥へ進んでいく雄二。
そうだよ、僕たち以外がいるわけないから仕様に決まってるさ。

そう自分に言い聞かせ、僕も雄二の後を追った。

第四話　始まりの島ルナ（後書き）

～あとがき～

今回は初の戦闘パートでした。
戦闘描写は難しいですね。
上手く書ける人は凄いと思います。
ゲームパートも本格的にスタートしました。
次回もまたよろしくお願いします。

第五話　祠内の死闘

「なにも出てこないね」

僕は隣を歩く雄二に話しかける。
祠の中はシステム上の設定なのか普通に回りが見えるので仲間を見失う心配がないのはありがたい。

「あぁ、ここまでなにもないと逆に怪しいな」

そう、もうＦ２階だというのにここまでモンスターの一匹も出てこないどころか、宝箱も無ければ、分かれ道すらないといった始末だ。
いくら最初のステージといえどもやりすぎではないだろうか？

「待て明久…」

いつの間にか少しだけ前を歩いていた雄二の制止の声に足を止める。
辺りを見回すと、そこは今までの狭い一本道と違い大きく開けた部屋だった。
そして中央には僕たちの数十倍はありそうな石像がたたずんでいた。
鎧を着ており、両手には巨大な斧を持っている人型の石像。
その姿は威圧感たっぷりで、僕は思わず一歩引いてしまう。

「明久、これどう思う？」

石像から5メートル程離れている雄二がたずねてくる。

心なしかその表情はひきつっているようだ。

「どう思うもなにも――」

と、僕が言い終わる前に石像の周りに赤のリングが表示される。

「雄二避けて！！」

僕の掛け声を受けて雄二は横合いに避ける。

ズドォーーーン！！

今まで雄二のいた所は石像の斧によって粉々に砕かれていた。

「ちっ、やっぱりそうかよ」

どうやら雄二もこの石像が敵ということは分かっていたようだ。
雄二がＲＰＧ経験者でよかった。これが未経験者だったら回避は間に合っていなかっただろう。

「雄二、大丈夫？」

「俺の方は大丈夫だ。それより第一ステージからこれはないんじゃないか？」

「しょうがないよ、あのクソババァが考えたゲームだもん」

そう言って、僕は敵に向き直る。
再度、赤いリングが表示されその横に『ゴーレムスターチュ　ＨＰ

６００』と表示されていた。
この横に表示されているのも、おそらく探索スキルによるものだろう。
どうやら、探索スキルが上がるにつれて敵の情報公開の幅も広がっていくらしい。
「雄二、ＨＰ６００だって。いけそう？」
敵から目を離さずたずねる。
「６００か…
俺たちの初期値が１００と１２０って事を考えると相当でかいな…」
「でも戦闘中はログアウトできないよ」
「んなことは分かってる。それにやらなきゃこちらがやられちまうだろ？」
雄二が楽しそうに言う。
やっぱり雄二は不利な状況が好きなのかな？
「初戦の時みたいに僕があいつのバランスを崩すから、隙をみて攻撃して」
「任せろ！」
やっぱり楽しんでいるみたいだ。
今までのどの闘いよりも楽しそうにしてる。

僕は獲物を構え、敵の後ろへ向かうため旋回する。
あの斧での攻撃は脅威だ。
直撃どころかかすっただけでも致命傷になりかねない。
しかし、その重い一撃ゆえに次のモーションまでは時間がかかる。
ならば常に相手の射程ギリギリいて攻撃を誘い、充分な余裕をもってかわせばいい。

自分の周りを旋回する僕を目障りに思ったのかゴーレムスターチュは巨大な斧を降り下ろしてきた。

ズドォーーーン！！

粉砕された床の欠片が小石となって飛び散る。
僕は射程範囲からバックステップで出ると、また旋回を始めた。

今の位置は、ゴーレムスターチュが雄二に右腕を見せている。
これでは奇襲が成功しづらいどころか、下手をすれば返り討ちにあってしまう。
だから、まだ雄二に合図をいれるのは得策じゃない。
ズドォーーーン！！

また降り下ろされる斧。
飛び散る石片。
そして雄二に背中を向けているゴーレムスターチュ。

「雄二今だ！！」

僕の掛け声と共に走る雄二。
ゴーレムスターチュは雄二の気配に気づいて斧を床から引き抜こうとしている。

だが雄二の方が二歩も三歩も早い！

「くらいやがれ、砕破！！」

雄二の拳に赤いエフェクトが現れる。
拳タイプのスキルの一つらしく、通常の攻撃に貫通能力をもたせるのだ。
いくら石でできているゴーレムスターチュでもこれならダメージを与えられる！

ズゴーン！

雄二の拳がゴーレムスターチュに叩き込まれた。
それと共にゴーレムスターチュの上には『６５』と数字が現れた。

「ちっ、６５しかくらわないか…」

雄二は悪態をついているが、ゴーレムスターチュは完全に体勢を崩している。

「雄二畳み掛けるよ！」

「あぁ！」

僕と雄二はそれぞれ攻撃を始める。
ゴーレムスターチュの上には次々と数字が表示されていく。
しかし、出の早さを重視する通常攻撃では満足のいくダメージを与えられない。
出る数字のほとんどが一桁台だ。

「グオォーーン！」

ゴーレムスターチュが叫び声を上げて体勢を立て直してしまった。
その横には『ゴーレムスターチュ　ＨＰ３２６』と表示されている。

「どうしよう雄二、まだ３２６も残ってるよ」

「半分以上か…
さすがに不味いな…」

雄二が苦虫を噛み締めたような顔でこたえる。
確かに雄二のいうとおり状況は最悪だ。
さっきはゴーレムスターチュの隙をみて攻撃したが２度目はそうはいかないだろう。
たとえ成功したとしてもさっき以上の攻撃をしなければ倒しきれない。
そして３度目はおそらく存在しない…

「とにかく距離をとろう」

そう雄二に言い、距離をとろうとしたがゴーレムスターチュの方が一歩早かった。
ゴーレムスターチュの斧が僕の方に降りあげられる。

ダメだ！避けきれない！？
僕は防御に徹するべく武器を前に構える。

そして降り下ろされる斧

「明久ぁーー！！」

その斧は僕を突きどばした雄二に直撃した…

「雄二…」

雄二の体が薄れていく。
その横には『坂本雄二　ＤＥＡＤ』と表示されていた。

雄二はゲームオーバーになったんだ、僕を庇って…
ゲームだってことは分かってる。
だけど、僕のせいで雄二に迷惑かけたという事実がやるせなかった。
僕がもっとしっかりしていればよかったんだ…

僕は立ち上がり、武器を構える。
おそらく攻撃力の低い僕じゃ、防御力の高いゴーレムスターチュに勝つのは難しいだろう。
いや、無理かもしれない。
だけどここでおとなしくゲームオーバーになったら雄二に会わせる顔がない。

「いくぞ！！」

僕はゴーレムスターチュ目掛けて走り出した

第六話　囚われの世界

雄二ＳＩＤＥ

「つぅーー」

俺がゲームオーバーになったことにより、風景はいつもの部屋に戻る。

明久のやつを庇ってゲームオーバーになった俺だが、なにも考えなしに庇った訳じゃない。

明久のステータスは俺に比べて素早さや機動力が高めに設定されている。

そしてあの石像のモンスターにはどちらか片方では勝つのは難しいだろう。

なら、攻撃を避けれる確率の高い明久を残して、俺が救援にいくのがベストだろう。

そういう訳で俺は明久を助けに行くため機動ボタンを押した。

次は『ＣＯＮＴＩＮＵＥ』選べばいいはずだ。

メッセージが表示される。

『ＥＲＲＯＲ』

故障かと思い、もう一度機動ボタンを押す。
しかし現れるメッセージは『ＥＲＲＯＲ』の一文字のみ。
まさか一度戦死したらテストを受けるまで入れないのだろうか？
仮にそうだとしても、それ相応のメッセージがでる筈だろう。
ここまで考えて俺は妙な不安感に襲われた。

明久のやつ帰ってこれなくなるんじゃ……

俺は急いでゲームをカバンにしまい、文月学園目指して家をとびたした。

なにがどうなってるかババァに問い詰める必要がある。

明久はバカなやつだが、決して悪いやつじゃない。
友としてやっていくには、またとない程にいいやつだ。
普段は互いに互いの足元に穴を堀合うような仲だが、あいつは俺の親友だ。
それにあつがいなくなったら悲しむやつが大勢いる。

明久、お前だってそんな顔見たくないだろ？

だから俺の思い過ごしであってくれ。
ただ単に点数が０だから『ＥＲＲＯＲ』と表示されたんだって。

あともう少しで文月学園だ。

そこの角を曲がれば――――

「うわぁ！！」

「きゃあ！！」

誰かとぶつかって俺のカバンからゲーム機が飛び出す。

「すまないな、って――」

「私の方こそすいません。って――――」

「「姫路（坂本くん）！？」」

なんとぶつかった相手は姫路だった。

ぶつかったのが俺じゃなくてあいつだったら、少しは二人の仲も進展してただろうにな。

っと、今はそんな事を考えてる場合じゃないな。

俺がカバンから飛び出してしまったゲーム機をしまい始めると姫路がおずおずとたずねてきた。

「坂本君、それってゲーム機ですよね？そんな物持ってどこ行くんですか？」

「悪いな姫路、今急いでいるんだ！」

もしもの可能性を考えて姫路には言わない。

もし明久の身に何かあったら真っ先に動くだろうから。

いや、おそらく明久にも同じ事がいえるだろう。

姫路が絡んだ時のあいつは凄いからな…

「すまなかったな姫路。またこん「待ってください！」
突然姫路に会話を中断させられてしまった。
その声はいつものかすれたような気弱な声でなく凛とはった声だ。
「待ってください坂本君。明久君に何かあったんですよね……？」
「なっ、姫路なぜそれを…」
「坂本君の焦りようを見れば分かります。
今の坂本君すごく焦っています。
まるで人の命が関わっているみたいに……」
俺は何も言えなかった。
ここで本当の事を言わず姫路をはぐらかすことだってできるはずだ。
でも今の姫路を前にしてそれは無粋な気がする。
「姫路、確かに今明久がピンチの可能性もある。
でもこれは俺の思い過ごしかもしれない。
お前に無駄な時間を使わせてしまうかもしれない。
それでもいいか？」
俺は分かりきった答えを待つ。
「はい！」
「いい返事だ。じゃあ、学園長の所まで行くぞ。」
俺と姫路は走り始める。

道中、姫路とお互いの情報を交換した。
俺は明久の身に迫っている身の危険ことを。

姫路からの話を要約すると、姫路は自主夏期講習に参加していたらしく、その途中で参考書を家に忘れたのに気づき、戻る所で俺とぶつかったらしい。

そして明久個人が関わっていると判断したのは俺がゲーム機を持っていたかららしい。

明久、おまえ姫路にどんなイメージいだかれてるんだ……

「入るぞクソババァ」

「坂本君ノックしなきゃダメですよ」
「それ以前の問題さね！？」
まさか姫路がここで天然属性を発揮するとはな……
「今、こっちは忙しいんだ。後にしてくれ」
見るとババァはなにやらパソコンの前で頭をかかえて悩んでいた。
「悪いなババァ、こっちも急ぎの用事なんだ。
あのゲームで聞きたいことがある」
「……
話を聞こうじゃないか」
「あのゲームは一度ゲームオーバーになったら、回復試験を受ける
までは『ＥＲＲＯＲ』って表示されるのか？」
そうであってほしいと願いたずねる。
俺の横にいる姫路も心配そうな面持ちでババァの方を見ている。
「すまないね……」
ババァが顔を下げる。
「明久君……」
「おいババァどういう事だ説明しやがれ！」

「言われなくたって説明してやるさ」
珍しくババァがいきり立っている。
多分、ババァなりに何かしら思うところがあるのだろう。
「これだよ」
そういってパソコンの画面をこちらに向けてきた。
そこには一通のメールが表示されている。
『只今をもちまして貴校の新システムを拝借いたします』
新システムとはおそらくあのゲームのことだろう。
「『ＥＲＲＯＲ』って表示されたのはおそらくこれが原因さね」
「もしかして明久君は戻ってこれないんですか……」
姫路が今にも泣きそうになっている。
「一応、連れ戻す手段はある。ただそれにはあのゲームの中に二人以上いる場合の話さね……」
二人以上、それは門が開く条件。
本来なら全校生徒でやるゲームなのだから常に二人以上はゲーム内にいる。
しかし、今プレイしているのは俺と明久だけだ。
そして、今俺がゲームをやってないってことは……
「あいつはゲームから出れない……」

「そういう事さ。
しかも厄介な事にゲームの世界とこちらの世界が完全にリンクしちまってる。
もともと召喚獣システムにオカルトの成分が入っていたのが原因だろうね」

ゲームの世界とこちらの世界のリンク。
それはあちらの世界でのゲームオーバーはこちらの世界での死……
そして俺はギリギリのところでゲームオーバーになったから死なないですんだ……
当然警察沙汰だが、こんなシステムを内蔵している学校だから、おいそれとそんなこともできないのだろう。

「あのバカは必ず私たち教師が助ける。だから辛抱しておくれ」

確かにそれが無難だろう。
なんせゲームオーバー＝死なんて危なすぎる。
それなら点数の高い教師陣にやらせた方が「私にやらせてください！！」

「姫路なに言ってんだ！？このゲームでのゲームオーバーは死に直結するんだぞ！！」

俺は突然の姫路の発言に止めにはいる。

「それは明久君も同じことです」

姫路の目は覚悟を決めていた。

あいつと同じ覚悟を決めた目……

案外、こいつらは似た者同士なのかもしれない。
誰かのために泣いて、誰かのために怒って、誰かのために一生懸命になれる、そんないいやつ同士だ。
そして一度スイッチの入ったあいつは誰にも止められない。
Ｂクラス戦の時、学園祭の時、肝試しの時、いつものバカとは思えないほどのことをやってのける。
なら、今の姫路に何か言うべきじゃない。

俺は黙って引き下がる。

「それに先生たちにはいけない理由があるんじゃないですか？
もし行けるならもう何かしらの処置をしてるはずですし」

確かにそうだ。
さっきのババァの発言を見る限り、明久を助けようとしているのは事実だろう。
ではなぜ俺たちがくる間なんの処置をとらなかった？
答えはとらなかったんじゃなくとれなかったんだ。
おそらくこの事件を起こしたメールの送り主のせいで。

「やれやれ、そういう鋭い発言はそっちのバカだけにしてほしいよ。
そうさ、確かに私たち教師陣にはいけない理由がある。
『ＥＲＲＯＲ』表示はなんとかした端末がここにあるが、妙なデータが入り込んだらしく、システムに負荷がかかって５００点以上を一教科でもとっていると入れないんだよ…
当然教師陣は全員アウトさね」

だから教師陣はいけないのか。
でも逆に言えば生徒なら姫路や翔子でもいけるという訳だ。
ムッツリーニはアウトだが……

「なら私が行っても大丈夫なんですよね？」

俺は姫路の方を一旦向き、学園長に向き直る。

「まっ、そういう事だ。
学園長、悪いが姫路と俺で行かしてもらうぜ」

「悪いね。私の失態だっていうのにあんたらに迷惑かけて」

申し訳なさそうにわびる学園長。

「気にすんなって。俺たちだけじゃゲームの中にすら行けなかったんだ。
『ＥＲＲＯＲ』表示が出ないゲーム機があるだけでもありがたいからな」

「学園長先生ありがとうございます」

深々と頭を下げる姫路。
本当に礼儀正しいやつだ。

「じゃあ、頼むよ」

俺たちは学園長から新しいゲーム機を受けとる。
起動スイッチを押すと『ＮＥＷ　ＧＡＭＥ』『ＣＯＮＴＩＮＵＥ』と表示される。

「姫路、付き合わせて悪いな」

「いえ、私の方こそ強引に着いてきてすいません。それとお願いしますね坂本君」

「こちらこそな」

俺は『ＣＯＮＴＩＮＵＥ』を選択しながら答える。

学園長の部屋があの街並みに変わっていく。

明久、死ぬなよ……

こうして俺の２度目の冒険が始まった。

第六話　囚われの世界（後書き）

ゲームの世界の一人残された明久。
そしてそのゲームでの死は現実での死と同義。
果たして姫路と雄二の二人は無事に明久を連れ戻す事ができるのか！？
そして今回は『似た者同士』を副題としてみました。
あの二人って共通点多いんですよね。
お互いに好きなのに気づかない、お互いの事になるといつもできないことができる等々。
本当、お似合いだと思います。
まぁ、私の書く明久は少し姫路さん依存症っぽいですね……
本家のような素晴らしい明久×姫路を書きたいです

第七話　死闘と再戦と迫りくる危機

明久ＳＩＤＥ

「はぁはぁ……」

ゴーレムスターチュからの攻撃を避け続けてもう何度目になるだろう？

幸い、攻撃は避け続けているがもう体力の限界が近づいている。

疲れで倒れそうな体を奮い立たせ、相手を見ると『ゴーレムスターチュ　ＨＰ２８７』と表示される。

雄二がゲームオーバーになって、威勢よく挑んだ結果がこの体たらくだ。

ハハッ……

これじゃ雄二にあわせる顔がないじゃないか。

もう攻撃を避けるので精一杯だ。

隙をみて攻撃を加えられるだけの体力なんて残っていない。

いっそのことゲームオーバーになってしまおうか？

そんな考えも浮かんでくるが、すぐにそれを払拭する。

確かに雄二に対する申し訳なさもあったが、ここで諦めたら取り返しのつかない気がしたからだ。

ズドォーーン！！

僕はまた攻撃をかわす。
段々と体をかすめる石片が増えている。
それは僕の回避が遅れてきてるということだ。

時間の問題かな……？

多分、もう長くはもたないだろう。
僕より戦闘面で優れたステータスをもった雄二が一撃でやられた攻撃だ。
僕も当たればそれで最期だろう。

ゴーレムスターチュがこちらに攻撃を仕掛けるべく斧を振り上げる。

大丈夫、この距離なら避けられる。

僕はバックステップをする。
斧はもと僕がいた場所に降り下ろされる。
飛び散る石片、そのなかでも一際大きな物が僕の方に！？

ゴーズズズ……

僕は真正面から石片に直撃し、飛ばされてしまった。
体中に酷い激痛がはしる……
見ると左上のゲージが減っており、『吉井明久　ＨＰ６４』と表示されていた。

僕は武器を杖代わりに起き上がろうとするが手に力が入らない……
ゴーレムスターチュの巨体がこちらに向かってくる。

あぁ……
僕はここで死ぬんだ……
なぜだか僕は死を間近に感じていた。
ただのゲームの筈なのに。

せめて死ぬなら、こんなゴツイのじゃなくて姫路さんを眺めて死にたかったな……

冗談混じりにそんなことを考える。
するとどうだろう、神様が日頃の僕の行いに情けをかけてくれたのか視界の端に姫路さんの召喚獣が見えた。
ついでに雄二の召喚獣も。

いくらデフォルメしたからって雄二を見て死ぬのは嫌だな……
早く雄二の幻だけ消えればいいのに……

そんな事を考え視線を戻せば斧を振り上げるゴーレムスターチュ。
この距離なら絶対に外れることはない。
第一僕は動けないんだ、外れるわけもない。

僕は覚悟を決めて目を閉じた。
斧を振り上げ、燃えているゴーレムスターチュを視界におさめて。

……燃えてる？

おかしい、ゴーレムスターチュが炎の技なんか使ったことはない筈だ。

疑問に思い目を開ける。

そこには燃えているのではなく、燃やされているゴーレムスターチュがいた。

「明久君大丈夫ですか！？」

「明久、助けに来たぞ！！」

声に振り向くと姫路さんと雄二の召喚獣がこちらに走ってくる。

正解にいえば、ここはゲームの中だから姫路さんと雄二が走ってきていることになる。

でもどうして姫路さんと雄二がいるんだろう？

「姫路は明久を頼む」

そう言って雄二はゴーレムスターチュに向かって走っていく。

「くたばりやがれ、岩砕破！！」

ズゴォーーン！

雄二の攻撃がヒットすると同時にゴーレムスターチュの上に１２８

と表示される。
１２８！？
僕の通常攻撃とは文字通り桁違いの威力だ。
攻撃を受けたゴーレムスターチュは体の重心を大きくずらされ、地面に伏っした。

「明久君しっかりしてください。いま治療しますからね」
そう言って僕の所に駆け寄ってきた姫路さんは術の詠唱を始めた。
あぁ、やっぱり僕は死ぬんだ……
だってここに天使がいるんだから。

「生命の息吹ここに宿らんヒール！」
姫路さんの術が行使される。
するとどうだろう、体の痛みは消え、立ち上がることができた。

「姫路さんありがとう」

「明久君もう大丈夫ですか？」
姫路さんが心配そうにこちらを見ている。
なんか粘ってて得した気分だ。

「うん。この通りもう平気だよ」

そう言って、僕は武器を振ってみる。

「明久君が無事で良かったです。もし明久君になにかあったらわた

「うわぁー！！」

ズドォーーン！！

僕たちの方に雄二が派手に飛ばされてきた。

どうやらガードを成功させたらしく致命傷にはなっていないようだ。

「いてぇ……

っと、明久大丈夫か？」

「あっ、うん。姫路さんのおかげですっかりだよ」

「よし、ならあいつにリベンジマッチといくとするか！」

張り切って敵に向かう雄二。

その後ろ姿を見て申し訳なく思う。

ごめん雄二、はっきりいって飛ばされてくるまで忘れてたよ。

僕はそんな気持ちを抱えながら敵に向かおうとする。

「煌めく閃光、シャイン！」

姫路さんの光の術が敵を貫く。

「さっきの仕返しだくらいやがれ、岩砕破！」

赤いエフェクトをまとった雄二の拳が敵を打ち倒す。
それと共にゴーレムスターチュのＨＰは０になり霧散した。
あれ僕の出番は……？

「やっと終わったな。まっ、明久が無事でなによりだ」
満足した顔で雄二がこちらにやってくる。
「はい、明久君が無事でなによりです」
姫路さんも笑顔でこたえる。
雄二と同じ言葉なのに何倍も嬉しい。
「そういえばなんで二人ともここにいるの？」
僕の質問に雄二が深刻そうに話す。
「あぁ、それはだな――――」
そこで僕は知ることになる。
今、僕たちがひんしてる危機とこのゲームの現状を

第七話　死闘と再戦と迫りくる危機（後書き）

明久を助け出した姫路と雄二。
そして明久に伝えられる危機。
次回、ついにルナ編最終回！？

ここで参戦キャラが3人になったので大まかな説明を。

～明久～
素早さ、機動力が高く回避がしやすい反面、攻撃力は雄二に劣る。
探索スキルを重点をおいているため様々な局面で役立つ。
ただし極端に知力が少ない。

～雄二～
典定的な接近型であり、攻撃力と防御力が高い。
機動力では明久に劣るため、下手な攻撃は返り討ちにあう要因となる。
職業は『翔子の婿（笑）』であり、（笑）までが職業名である。

～瑞希～
知力が高く、様々な属性技を覚える。
大剣での威力も中々であり、前衛後衛とそつなくこなせるオールラウンダー。
回復呪文であるヒールは素行が加味され初期から習得済みである。
職業は次回参照。

第八話　仕組まれた罠

「今の状況は理解したけど、これから僕たちはどうすればいいのかな？」

状況を説明してもらった僕は率直な疑問をたずねる。

「どうするもなにも、俺たちは明久を助けに来ただけだしなぁ？」

「そうですね。このままゲームから出るのがいいと思いますけど」

まったくだ、いつまでもこんな危ないゲームの中にいる程僕はバカじゃない。

「ならログアウトしようか」

「「そうだな（ですね）」」

僕の提案に二人とも頷く。

僕たちはそれぞれログアウトを選択する。

そういえば僕だけ入ってきたゲーム機が違うから、自分の家に戻るんだよな。

僕たちの体が光に包まれていく。

「帰ってきたかい」

……？

なぜだかしわがれた妖怪の声がする。
疑問に思いながら目を開けると、そこにはお馴染みのクソババァがいた。

「クソババァなんで僕の家にいるんだよ！？」

「開口一言目がクソババァかい！
それにここは学園長室だよ！」

「えっ？」

見回してみると確かに学園長室だ。
姫路さんと雄二もいる。

「明久、なんでおまえここにいるんだ？」

「さぁ……？」

当然のことながら分かるはずがない。

「おそらくこの端末以外は出入りが両方とも禁止されてるんだろうさね。

まったく、忌々しいもんだよ」

どうやらメールの送り主のせいらしい。

「でも明久君の体は明久君の家にあったはずなのにどうしてこちらに出てくるんですか？」

姫路さんの質問に僕も頷く。

「そうですよ。あれって周りの景色を変えるだけじゃないんですかクソババァ？」

「あんた本当にバカだねぇ。

周りの景色変えただけであんなどんちゃん騒ぎやったら、すぐ壁にぶつかるだろう？

あれは意識を飛ばして、そこに仮想空間をおいてるのさ。

だから体自身は動いてないんだよ。

ちなみに動かない体があるのは邪魔だから、召喚獣が物質に触れないのと同じ施しをして透明状態でおいてあるのさ。

で、こっち側に出てきた理由はオカルトが混ざってるからとしかいえないねぇ」

このクソババァ、分かんないことがあったら全部オカルトで片付け

る気だな……

ジリリリリ！！

「えっ、なに！？」

突然の警報音に僕たちはたじろく。

「やられたよ……」

学園長がパソコンを前に頭を抱える。

「学園長先生どうしたんですか！？」

「こっちがゲームの復旧に躍起になってる間に召喚システムがやられたよ。

そして今さっき召喚システムが作動させられたんだ」

「つまりはどういうことですか？」

頭の上に？マークを浮かべる僕に学園長はメールを見せてきた。

『只今、この学園にいる全生徒は私の所有するゲームに幽閉いたしました。

あなた方が全てのＶＣ（ヴィジョンコイン）を集めることができれば、このシステムはお返ししましょう』

メールを読んでいる僕たちに学園長は言い加えた。

「幸いあんたらはここにいたから対象外さ」

こことは学園長室のことだろう。
確かに学園長室で召喚フィールドが出たことがないのを考えると対象外なのかもしれない。

「全員閉じこめられたってどういうことだよ！？」

雄二が学園長につかみかかる。

「手を離しなデグの棒。
バカでも分かりやすくいえば、このゲームは召喚システムを使って成り立たせている。
それの大本である召喚システムが乗っ取られれば、召喚フィールドが及ぶ全生徒が対象になるってことさ」

「そんな……」

雄二が力なくうなだれる。

もしかして霧島さんのことを心配してのかな？

「雄二、元気だして。霧島さんだって僕の時みたいに助けてあげればいいじゃないか」

僕は雄二を励ます。

「違うんだ明久……
翔子にこのゲームの事を知られたらなおさら逃げ場がなくなるだろうがぁーーー！！」

うん、雄二が人間味のあるやつだと思った僕がバカだったね。
「あのぅ、坂本君、あのゲームはテストプレイが終わったら全生徒に配布される予定だったんですよ？」
「どっちにしろ霧島さんからは逃げられないじゃん」
「ちくしょぉぉぉーー！！」
雄二の叫び声が学園長室に響く。
「あんたら静かにしなよ。
あんたらに話さなきゃいけないことがあるんだからさ」
「話さなきゃいけないこと？」
首を傾げる僕たち。
「おそらく出口はここにある端末一つだ。
そしてこの端末からでるには、ここから入ったやつとパーティーを組まなきゃならない。
だから申し訳ないがもう一度、ゲームの中に行って生徒を助けてくれるかい？
そしてできることなら各ワールドに一つずつあるＶＣを全て集めてきて欲しい。
こちらも出来る限りのバックアップはしてやるからお願いだよ」
学園長が悲痛な面持ちで懇願する。
「まっ、ここまで頼まれちゃったらしょうがないですね」

僕がこたえる。

「なに、助けるやつが増えただけだ問題ないだろ」

いつの間にか錯乱状態から復活した雄二もこたえる。

「今、私たちができる最善の策をつくしましょう」

姫路さんもやる気のようだ。

「重ね重ねすまないね。
門から行ける場所は全て解放したから好きなところから回ってくれ。
それとゲームの中での姿をいつもの姿にしといてやるよ。そっちの方が動きやすいだろうしね」

確かに召喚獣の体よりも普段の体の方が段違いに動きやすい。

「レベルとかも上げてくれればやりやすいんだけどな」

「それは無理な話だ。
レベルやスキルはシステムの根本が管理してて、今は乗っ取られてるからね」

どうも無理らしい。

「まっ、動きやすくなっただけマシだな」

「それと始まりの島ルナにはもうＶＣはないよ。
今さっき、誰かが入手したらしく反応が消えたからね。

ったく、こんな時でも遊び根性だけは立派なやつがいるもんだねぇ」
学園長が悪態をつく。
でも一体誰が始まりの島ルナのＶＣを手に入れたんだろう？
なるべく早く見つけないとね。
「よし、明久、姫路、準備はいいな？」
「「うん（はい）」」
雄二の掛け声に僕と姫路さんがこたえる。
ゲームスタート！！

目を開けるとそこはあの門がある街だった。
さすがに三度目ともなると見慣れてくるよね。
そして僕たちの体はなにも変化がなくいつも通りだ。

学園長も仕事早いなぁ…

少し感心してしまう。

「早速だけどどこに行く？」

門の方に歩きながら二人にたずねる。

「いや、まずは姫路のステータス確認が先だ。
お前を助けに行くときは焦ってて確認してなかったからな。
姫路いいか？」

確かに戦力の把握は必要だからね。

「あっ、待っててくださいね。」

姫路さんのメニュー画面が表示され、ステータスを選択する。

～姫路瑞希～

職業　ロードプリンセス
ＨＰ　９０
ＳＰ　８０
攻撃力　３０
防御力　３５
素早さ　３０
知　力　１００
機動力　３０

E大剣
E聖騎士の鎧

「さすが姫路さん、知力がものすごく高いね」

本当に高い。
なんせ僕の約３３倍もある……

「いや、それ以前につっこむところがあるだろ？」

雄二が呆れた目で僕を見ている。
こいつめ、僕をバカにしてるな？

つっこむところ、つっこむところ……

あっ、あれか！

職業が吉井明久の嫁になっていないところか！

っと、冗談はおいといて。
ヤバい……
本気でどこがおかしいか分からない……

こうなったら！

「姫路さん、先を急がないとだしステータス画面しまっていいよ。」

逃げに徹するしかない！

「そうですね、先を急ぎましょう」
そう言って僕たちは門の方へ歩いていった。

『行き先を選択してください』
門の前にメッセージが表示される。
「どこにしようか？」
僕の質問に姫路さんがこたえる。
「ここなんてどうでしょうか」
「魔導図書館エクスダリオンか。姫路らしいな」
確かに図書館とは姫路さんらしい。
僕はあまり文字ばかりある本は苦手だけど……
「あっ、ダメなら別の所でいいんですよ。
私の個人的な意見ですから…」
「ダメな訳ないよ。雄二もいいでしょ？」
「あぁ、俺は構わないぞ」
「私のわがままでごめんなさい、明久君、坂本君」

姫路さんが頭を下げる。
髪の毛がフワッとしていて触り心地がよさそうだ。
「わがままだなんて思ってないから大丈夫だよ」
「姫路は少し自分を謙遜しすぎだな。
もう少し自分に自信をもて」
確かに姫路さんは自分をおしころしてしまう癖がある。
その謙虚さが姫路さんの魅力でもあるんだけどね。
「自分に自信ですか……」
「そうだ、もっと自信をもて」
「はい、私頑張ってみます！」
小さくガッツポーズをする姿がなんともいえない可愛らしさをかもしだす。
そんな姫路さんを見て雄二はニヤニヤしていた。
こいつなにか企んでるな？
「おい明久、姫路、行くぞ」
そう言って、雄二は行き先を選択する。
『魔導図書館エクスダリオンに決定しました』

そうメッセージが表示され、僕たちの体が光に包まれていった

第八話　仕組まれた罠（後書き）

文月学園の仲間を助けるためゲームに挑む三人。
始まりの島ルナのＶＣは誰の手に！？
そして次回からはエクスダリオン編！

以下、雄二の技説明

～砕破～
相手の防御力を無視してダメージを与える貫通技。
読みは「さいは」

～岩砕破～
砕破が対岩石属用に改良された技。
岩石属以外には普通の砕破と同じ威力。
読みは「がんさいは」

第九話　魔導図書館エクスダリオン（前書き）

読んでくださる方、お気に入り登録してくれた方どうもありがとうございます

第九話　魔導図書館エクスダリオン

「明久右だ！！」

雄二の掛け声を受けて僕は右から迫ってくるクラガキというモンスターを斬りつける。

「終わりだ、連破掌（れんはしょう）！」

雄二の拳から闘気が打ち出され、敵を打ち倒す。

「煌めく閃光、シャイン！」

僕の後ろを姫路さんの放った光の矢の呪文がかける。

見ると、僕の後ろでは別のクラガキが光の矢にやられて倒れていた。

どうやら二匹とも戦闘不能になったらしく、霧散していく。

「助かったよ。ありがとう雄二、姫路さん」

僕は少し離れた所にいる二人にお礼を言う。

「ったく、気をつけろよな」

雄二は相変わらず憎まれ口だ。

「それにしてもここは敵が多いですね」

姫路さんの発言に僕もうなずく。

「確かに最初のステージと比べると敵との遭遇率が高いよね」

「ゲームなんだから、それくらい普通だろ？」

確かに雄二の言う通りだ。

でもここのモンスターにはどこか違和感がある気がする。

「そんなこと気にしてたって仕方がねえんだから行くぞ」

僕の不安を他所に雄二はツカツカと歩いていってしまった。

「明久君、早くしないと坂本君に置いてかれちゃいますよ？」

姫路さんも言ってることだし先を急ごう。

今、僕たちのいる魔導図書館エクスダリオンは僕たちの身の丈程もある本を扱う図書館で、まるで小人になったような気分だ。

姫路さんもこのステージに入ってきた時には目を輝かせていた。

きっと本の中身が気になるのだろう。全部終わったら姫路さんとここでゆっくりするのもいいかもしれない。

きっとこの大きすぎる本を広げ、文学を満喫するにちがいない。

ただし、今はその大きすぎる本棚が死角になって敵に襲われるから、

細心の注意をはらわなければならないので厄介なこと極まりない。
それと学園長からデータメールで送られてきた情報によるとここのどこかにＶＣを持った人がいるらしい。
なるべく早く見つけたいものだ。
ふと上を見上げるとそこには鏡があった。
どうやらここのステージは所々で鏡が浮いており、反射を利用して遠方が見える仕組みのようだ。
と、そこに見知った人物が映る。
「秀吉に美波！？」
僕が突然声を上げたため姫路さんと雄二が駆け寄ってくる。
「明久君、木下君と美波ちゃんがいたんですか！？」
「ほら、そこの鏡の中にいるよ」
僕は浮いている鏡を指さす。
「ん？秀吉のやつやけに焦ってないか？」
雄二の発言に僕も目を凝らしてみる。
しかし、光が反射してしまっておりうまく見えないのだ。
ただ、秀吉がなんとなくいつもと様子が違う気がする。

それに美波も動いていないみたいだけど、どうしたんだろう？
疑問に思うのだが、光のせいでうまく見えない。
「明久君、美波ちゃんと木下君はあっちです」
姫路さんが右側の道をさす。
僕たちが鏡に夢中になっている間に反射を計算してくれたのだろう。
やっぱり姫路さんは頭がいいなぁ。
それに比べて僕は……
ついネガティブになりそうになった僕に雄二が声をかける。
「明久、この先の様子は？」
僕が目を凝らすと青いリングが三つと緑のリングが三つ浮かんできた。
探索スキルも１０の内の５くらいにはなってきたので、少し遠方のものでも判別できるようになったのだ。
そろそろ攻撃系のスキルも充実させないとね。
「罠が三つとパーティー外のプレイヤーが三人だね」
「罠が三つもあるんですか……」
僕の報告に姫路さんがしゅんとする。
それもそのはずで、姫路さんはここに来てから四回も罠にかかっている。

いくら罠があると分かっても具体的な場所までは分からないのだ。
幸い、パイ投げ等のどれも他愛もない罠だったので大事には至っていない。
そのパイ投げのクリームもシステムなのか一定時間で消えているので実質損失は無いといってもよい。
にしてもなんで姫路さんばかり罠にかかるのだろう？
雄二いわく姫路さんには天然属性があるからしい。
一体、姫路さんのどこを見たら天然に見えたんだろうか？
しっかり者の姫路さんが天然な訳ないのになぁ……

「非パーティープレイヤーが三人となると島田と秀吉とあと誰だ？」
雄二が怪訝そうな声でたずねてくる。
「誰だかは分からないけど、どうせ今はみんな仲間みたいなものだし心配いらないんじゃないかな？」
「だといいがな」
雄二はなぜか納得いかないようだ。
「もしかして、始まりの島のＶＣを持ってる方じゃないでしょうか？」
確かに可能性は十分にある。

「だとしたらヤバイな……」

「そうですね……」

「なにがそんなにヤバイの？」

正直いって二人の思考回路にはついていけない……

別に僕がバカって訳じゃなくて二人が頭良すぎるだけだからね。

「まず、秀吉と島田はおそらくここから一度も出ていない。
出たことがあるなら安全な街で待機してるだろうしな。
そして始まりの島にいた石像に俺たち二人じゃ太刀打ちできなかった。
そこに姫路と祠に行くまでの道中にレベルの上がった俺を加えて勝てたんだ。」

「うんうん」

僕は雄二に相づちをいれる。

「で、あの石像はあの島のボスじゃない。
ってことはボスはあいつより更に強い。
そしてVCを持っているやつはそいつを倒した。
でも考えてみろ、ゲーム始めたばかりのやつがボスに勝てると思うか？」

「集団で倒したんじゃないかな？」

普通に考えてそれくらい思いつくと思うけど……

「ならいいんだ。ただ俺と姫路が言っているのは、反応のあったもう一人がＶＣを持っていたらの話ってことだ」

反応のあった三人の内二人は秀吉と美波。
そして残る一人がＶＣを持っている人物。
その場合、ここから出ていない秀吉と美波のパーティーではない……

「まさか！？」

驚愕する僕に雄二がうなずく。

「そう、そいつはボスを一人で倒す程の力をもったイレギュラーだ」

第九話　魔導図書館エクスダリオン（後書き）

美波と秀吉に迫る危機！？
イレギュラーとはいったい……？

雄二「そういえば作者は最近あるＭＡＤにハマってるんだってな」

そうなんですよ。
バカな英雄と召喚獣というＭＡＤなんですがすごい良いんですよ。
バカテス好きの方は是非どうぞ。
特に明久×瑞希推しとしては２：２８をオススメしたいんですよ。

雄二「よくよく考えたらこの話題バカとゲームと召喚獣との関連性０じゃねえか」

一応、バカテス関連だからいいのでは？

雄二「いや、ダメだろ。ってことでここで中止だ」

そんな！？
まだ色々と言いたいことあったのに……

皆様のおかげでＰＶが５０００を越えました。
拙作にお付き合いいただき誠にありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

第十話　イレギュラー（前書き）

息抜きで制作していました『ぼくとみんなと如月グランドパーク』に手間取ってしまいこちらの更新が久しぶりになってしまいました……

この間に評価、感想、お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます

第十話　イレギュラー

秀吉ＳＩＤＥ

「いったいなんなのじゃ？」

目の前にひろがる奇っ怪な景色を見て呟く。

自主夏期講習に来ておったわしは、突然光に包まれここにおるのじゃ。

その風景を一言で表すなら図書館じゃろうが、いかんせんサイズが桁違いじゃ。

書物はわしの身の丈ほどもあり、本棚にいたってはわしの何倍もある。

更には頭上に鏡が浮いておる始末じゃ。

しかし、この景色どこかで……？

そう、あまりにも奇っ怪なこの場所をわしは見たことがあるのじゃ。

それがどこだかはわからんが、確かに見たことがあるのじゃ。

「きゃぁぁぁーーー！！」

突然の悲鳴にわしは走り出す。

確かこの声は島田のはずじゃ。

本棚の角を曲がり、悲鳴の聞こえた場所につく。

「なんじゃ、こやつは！？」

そこにいたのは気絶しておる島田と、まるで子供のラクガキが実体化したかのような生き物（？）なのじゃ。
しかし、体は薄っぺらく生きておるかすら定かではない。

そのラクガキが目標を倒れておる島田からわしに変えてきおった。
人のような成をしている分、能面のように貼り付いておる笑顔が不気味じゃ。

飛びかかってくるラクガキ。
わしはそれを寸でのところでかわす。

幸い、動きはそんなに速くないようじゃな。
しかし、このままでは消耗戦になってしまうのぅ。

消耗戦になってしまったら、攻撃手段をもたないわしが圧倒的に不利じゃ。
かといって島田を置いていくわけにはいかんしのぅ。

「グシャルル」

ラクガキが奇声をあげ、再度襲いかかってくる。
わしはそれを再度かわす。

こういうものは攻撃に意識を傾けておらねば、大概当たらぬものじゃ。

しかし前述の通り、わしには勝つ手段も、生き残る手段もない。
せめてわしがねばっておる間に島田の意識が回復すれば、一緒に逃げ仰せるのじゃが。

「グシャルル」

「！？」

ぬかった……

まさかわしが考えておる最中にあそこまで間合いを詰められておろうとは……

しかし不思議な事に痛みはあるが、血は出てこん。
代わりに、わしの頭上左上の緑ゲージが減っていく。

まるでゲームじゃな……

しかしそう考えればこの奇っ怪なものも説明がつく。
ただ、なぜわしや島田がゲームの中にいるかという疑問が残るがのう。

「グシャルル」

「っと、危ないのぅ」

わしはラクガキの攻撃を避けながら考える。

仮にゲームであるならば、わしもなんらかの攻撃手段があるはずじゃ。

しかし生憎わしは何も持っておらぬ。
手ぶら装備から始まるゲームもどうかと思うのぅ……
しかしパンチくらいならどうにかなるのではないか？
わしはラクガキの隙をみて拳をくれてやることに決める。
「グシャルル」
またもやラクガキがこちらに来る。
わしはそれを横にかわし、拳をくれてやる。
拳は当たったのじゃが、なんだか雲を殴ったような感触じゃのぅ。
あのラクガキの上には8と数字が表示される。
いったいなんじゃろう？
もしダメージ値なら、この上なく虚しいのじゃが……
「グシャル、グシャルル」
どうやら怒らせてしまったみたいじゃ……
ラクガキはいきりたってこちらに向かってくる。
もう一発決めてやるのじゃ！！
一度、攻撃が通ったことにわしはいい気になっておった。
だから、ラクガキの爪が変形し、鋭く伸びているのに気づいたのは
わしの目の前に来てからだじゃった。

この距離であの長さの爪は避けることはできん。
そしてさっきのゲージの減り具合から考えて、この攻撃を耐えきることはできん。

すまぬ、島田よ。
わしは何もできなかったのぅ……

わしは覚悟を決め、敵を見据える。

男なら最期まで凛々しくじゃ！

しかしラクガキの動きが止まっておる。

「十壊道斬影（じゅっかいどうざんえい）」

突如聞こえた聞きなれぬ声と共に、ラクガキは真っ二つになり532と頭上に現れたら数字と共に消滅しおった。

そしてラクガキがおった場所には一人の男が立っておる。
妙齢18くらい、整った顔立ち、刃物のような鋭い目付き、鮮やかなオレンジ色の髪、膝まである黒衣のマント、腰に提げた長剣。
その姿は男であるわしから見てもかっこいいものじゃった。

「危ないところを助けてもらいすまぬのぅ」

「礼などいらん」

わしの礼に対してなんとも素っ気ない態度じゃのぅ……

「ところで最果ての神子を見なかったか？」

「なんじゃそれは？」

最果ての神子と言われてもわしにはさっぱりじゃ。
第一、ここがどこかも知らんというのに……

「最果ての神子とは、アンノウンの求愛をうけた神子のことだ」

「？？？」

ますますわからんのじゃ。
アンノウンやら最果ての神子やらいったいなんなのじゃ？

「知らないならいい。せめて死なないようにするんだな」

「待つのじゃ！」

わしは男を呼び止める。

「せめてお主の名と、ここはどこかを教えてほしいのじゃ」

「俺はゼノン。ゼノン・アキュリス。
そしてここは魔導図書館エクスダリオンだ。
それ以上のことは自ら見つけるんだな。できなければ死ぬだけだ」

ゼノンはそれだけを言うと早速と行ってしまった。

「ゼノン、感謝するのじゃー」

わしは聞こえぬかもしれぬ礼を大声で叫んだ。

「ん……」

後ろから島田の声が聞こえてくる。
どうやらわしの大声で起こしてしまったようじゃな。

「島田よ、目が覚めたかのぅ？」

「木下……？」

目をあけた島田は弱りきった顔をしておった。
きっとあのラクガキを見て怖かったのじゃろう。

そういうところはかわいい女子じゃのぅ。

「木下ありがとう」

そう言うと共にわしに抱きついてくる島田。
かっ、顔が近いのじゃ／／／

「なっ、なにをするのじゃ！？」

「ごめん、でもウチ怖かったの。
気づいたらこんな変な所にいて、オバケみたいなやつも出てくるんだもん。
あいつを追い払ってくれてありがとう」

やはりあのラクガキが怖くて気絶しておったか。

にしても妙な勘違いをされてしまったのぅ。

「実をい「おーい、秀吉、美波ー」

本棚越しに声が聞こえる。
これは明久の声かの？

「木下ありがとう。
ウチはもういいからアキたちの方にいきましょ」

島田がわしから離れ立ち上がる。
わしも立ち上がると本棚の影から明久、雄二、姫路の三人がやって来た。

「明久たちよこちらじゃー」

そしてわしたちは明久らと合流する。
それと同時にわしらの立たされておる立場を知ってしまったのじゃ。

第十話　イレギュラー（後書き）

秀吉の前に現れた謎の剣士ゼノン。
彼はいったい？
そして彼の探している最果ての神子とは？

今回の技紹介

～十壊道・斬影～
ゼノンの専用の特技であり、剣の切れ味をあげる技。
その切れ味は影をも斬るといわれる。
十壊道はこれ以外に９つあり、ゼノンはそれらを駆使する。

明久「思うんだけどさ、この話って回が進むごとに厨二度が上がってるよね」

だからなに？

明久「だからなにじゃないよ！世の中みんなお前みたいな厨二患者だと思うなよ！！」

ＲＰＧ題材にしてたらしょうがないことだよ

明久「開き直んなよ！」

うるさいなぁ……

あっ、姫路さんのスカートが！

明久「なぬっ！？」（ブシャァァァー）

よし、邪魔者も片付いたことだし、次回もお楽しみに！

第十一話　合流

明久ＳＩＤＥ

「――という訳なんですよ」

姫路さんが美波と秀吉の二人に説明し終える。

やっぱりというか、姫路さんの説明は要点を抜き出しているから解りやすい。

霧島さんの家での勉強会の時にも思ったけど、いかにも才女って感じだ。

「うむ、大体のことは理解できたぞ」

「ウチも概ね分かったわ。

だけどウチらの装備は？」

「念じればいいんじゃねえか？姫路の時もそれで出たしな」

美波の疑問に雄二が答える。

僕と雄二の二人はゲームがおかしくなる前からやっていたからか、武器を取り出してるのがデフォルトだったけど、姫路さんの大剣は戦闘時だけ出てきている。

第一、デフォルメすらされていない姫路さんが大剣を持ちながら歩いているのは違和感がありすぎるよね……

いや、むしろ健気に頑張っている姫路さんが！？
そうか、これが新たな境地なんだ！！

「おぉ、わしは薙刀じゃな」

冗談（7割はありだと思ってました）はおいといて、秀吉の方を見ると薙刀を構えている。

なんで演劇部なのに、こんなに薙刀が似合うんだろう？

「ウチはサーベルね」

美波はサーベルらしい。

なぜか召喚獣の持っている時よりも鋭くなっているのは気のせいだと思いたい。
しかし、サーベルを持っている美波は男らしさもあいまって中々様になっている。

「アキ、このサーベルの第一被害者にしてあげようか？」

「ごめん美波、だからそんな鋭利な物を僕に向けないで！」

「次はないからね」

なんとかサーベルを下げてくれたが、なんで毎度僕の考えることはバレるんだろう？

というか、なんで僕だけ召喚獣とは違う装備だったの！？

「なんだ二人とも召喚獣の装備と同じか。
面白味がないな。お前もそう思わないか明久？」

「やめて雄二、僕が考えていたことをいちいち掘り起こさないで！」

「私は明久君の装備も個性的でいいと思いますよ」

姫路さんのフォローは嬉しいけど、このやり取りは以前にもあったよね。
確かオチは……

「そっ、そんなことより二人のステータスを確認しようよ」

困ったときのステータスの話題発動！

「そうねウチも気になるし見てみようかしら」

「しかし、どう見たらいいのじゃ？」

「それならメニュー画面からステータスを選択すればいいんだよ」

自分のためなら面倒な説明もかってでるって、人間としてどうなんだろう……

「「でたぞ（わよ）」」

僕たちは合流した時にあらかじめパーティー登録していたため、二人の画面が見える。

～木下秀吉～

職業　稀代の美少女！？
ＨＰ　９５
ＳＰ　４０
攻撃力２５
防御力１０
素早さ３５
知　力　２０
機動力４０

Ｅ　薙刀
Ｅ　袴

「うん、秀吉は薙刀での中距離攻撃が主体となりそうだから防御力が少ないとして、後は普通にいいんじゃないかな？」

「いい訳ないじゃろ。
わしは男じゃと言っておろうに！」

いつものやり取りをしている最中に秀吉の肩に美波の片手がおかれる。

「木下、あんたはまだましよ。
ウチのステータスを見なさいよ！」

みんなの注目が美波のステータス画面に集まる。

～島田美波～

職業　ツルペタ貧乳騎士
Ｈ　Ｐ１１０
Ｓ　Ｐ　１０
攻撃力６０
防御力２５
素早さ３０
知　力　５（ドイツ語なら推定３０）
機動力３５

Ｅ　サーベル
Ｅ　軍服

ヤバい……
ツッコんだら殺される……
ここは無難なせんで

「さすが美波、攻撃力が高いね」

「アキ、死にたい？」

どうやら地雷踏んだらしいです。
さよならみんな……

「明久君、女の子にそんなことを言うなんて失礼ですよ」

確かに姫路さんの言う通りだ。
僕が軽率すぎたから美波を怒らしちゃったんだよね。

「ごめん美波、僕が軽率すぎたよ」

僕は頭を下げる。

「べっ、別に分かればいいのよ」

どうやら美波は許してくれたようだ。

「姫路さんもありがとう。
姫路さんの指摘のおかげだよ」

「いえ、明久君の反省しようとする気持ちが美波ちゃんに伝わっただけですよ」

「でも姫路さんが指摘してくれなかったら、僕は気づけなかったわけだし……」

「それでも美波ちゃんに許してもらえたのは明久君自身の成果ですよ」

「いや、姫路さんのおかげだよ」

「そんなことありませんよ。明久君自身の成果ですから」

「はいはい、ごちそうさまでした。
明久と姫路もその辺にしといて、出発の準備をしろ」

雄二に言われた通り、支度の準備をする。
途中、なにか言いたそうな秀吉が視界の片隅に入ったが、支度で忙しいため後にすることにした。

それに秀吉なら自分で解決しちゃいそうだから心配しなくても大丈夫だろう。

それにしても、雄二のやつ何を食べたんだろう？

急にごちそうさまなんて、遂にはボケちゃったのかな？

第十一話　合流（後書き）

毎度の事ながらステータス画面では遊ばせてもらっている唐笠です。

今回、美波のステータスが色々と悲惨でしたが、美波の事を嫌っているわけではありません。

むしろ、キャラ的にかなり好きです。

ただ、ステータス画面を作るなら美波が一番いじりやすかったんです。

美波ファンの皆さま、すいませんでした。

第十二話　外法魔導書

僕たちが美波と秀吉と合流してからしばらく、エクスダリオンの探索を続けていた。

途中、何度か戦闘になったりしたけど、二人とも中々の順応力で大した問題は起きていない。
むしろ、戦力が増えて戦いやすくなっている。
ちなみに、姫路さんや美波曰くゲームだと分かっていればモンスターも怖くないらしい。

ただ、姫路さんの罠にかかる率が刻一刻と上昇してるのは気のせいだと思いたい。
でも、一度も惨事になるどころか、ダメージすら受けてないのはすごいと思う。

隠しパラメーターに『運のよさ』とかがあったりしてね。

そんなことを考えてる僕の視界に青のリングが５つ映る。

「みんな、敵が来るよ！
数は５匹だから手分けして倒そう！！」

僕の掛け声で全員が戦闘体制にはいる。

手分けしてっていっても、なるべくなら中継向けの姫路さんと秀吉の方にはいかせたくないよな。

僕が姫路さんと秀吉の前に立つと、雄二と美波も意図を理解したらしく、僕の横に並ぶ。

「それぞれ深追いはせずに敵を迎え撃て。
姫路と秀吉は後衛援護を任せたぞ」

「わかりました！」

「うむ、ガッテンじゃ！」

さすが雄二といったところだろうか。
最低限の事柄だけを決め、戦略をたてている。
伊達にクラス代表やってる訳じゃないってことだよね。

僕は姫路さんの前で、雄二と美波の間に位置してる。
位置的には最も支援を受けやすい場所だけど、同時に敵の的にもされやすい。

それに後ろの二人を護る際には要にもなる。
すなわち、僕が突破されることは後ろの二人に攻撃を通すことと同義。

もとよりゲームオーバーは死に直結するが、これは負けられないな。

青のリングが本棚の後ろから４つと本棚の中から１つ現れる。

本棚の後ろから出てきたのは何度も戦っている『クラガキ』というラクガキみたいなモンスター２匹と、絵描き筆に顔がつき、先が鋭利に尖っている『マジック・フェルト』というモンスターだ。

それぞれ『クラガキ　ＨＰ９０』・『マジック・フェルト　ＨＰ７５』と大したことはない。

ただ、本棚から出てきた一際大きな魔導書のモンスターが問題だった。

表面にはいかにも禍々しい模様が施されているし、なにより『外法魔術書パドゥール　ＨＰ１２００』と表示されている。

ＨＰだけみても桁違いな相手だ。

正攻法で攻めても勝ち目はないだろう。

「みんな気をつけて。

あの魔術書のモンスター、パドゥールっていうんだけど、ＨＰが１２００もあるよ」

「久しぶりに殴り概があっていいじゃねえか」

雄二は片手を開き、もう一方の握った拳で叩く。

こいつは本当に楽しそうだなぁ……

「おそらく、なんらかの魔術を使ってくるでしょうから用心してくださいね」

確かに姫路さんの言うとおりだろう。

なんせ外法魔術書なんて物騒な名前が付いていて何も魔術を使ってこなかったら、拍子抜けもいいところだ。

「ウチはアキ以外にいたぶれる相手が見つかって嬉しいわ♪」

お願いだから、そんな物騒なことを言わないで。

このままだと強敵が出てくる度に、僕の命が削られるようなものだから！

「しかし本相手ではちと、心が痛むのぅ」

秀吉は演劇部の台本で本に馴染みがあるだろうけど、ここは我慢してもらおう。

それにしても探索スキルって以外に便利だよね。
敵を発見してから、こういう風に戦況を把握しても遅くはないんだから、ある意味必須スキルなんじゃないかな？

「来るぞ、構えろ！」

僕の担当すべき範囲にいる敵はクラガキとマジック・フェルトの各一匹ずつだ。

雄二は残りのクラガキを美波はマジック・フェルトを担当している。

そして肝心のパドゥールはページをペラペラとめくりながら魔方陣を構成し、術の詠唱をしている。
しかし距離が離れているため、こちらからは攻めれない。

まずはこいつらを倒してからだ！

僕は二人を護れるギリギリの範囲まで出て、二匹に対峙する。

まずはクラガキを攻撃する。
しかし、その攻撃は簡単にかわされてしまう。
僕はマジック・フェルトに攻撃される前に一歩ひく。

すこしあの技でも試してみるかな

「よっと、地盃雷（ちはいらい）」

僕の技の発動と共に、僕の真下が赤く光る。
しかしそれ以上はなにも起きない。

今はね……

僕の技に警戒していた二匹だが、なにもないとわかると二匹同時に襲いかかってきた。

それに対して僕は一歩下がるだけ。

近づく二匹が地盃雷を使った地点、すなわち僕の目の前にたどり着いた瞬間、地面から電流がほとばしる。
感電して動けない二匹はこちらを睨み付けるが、今となってはなにもできやしない。

僕はそのまま数度、二匹を斬りつける。
二匹は特に抵抗もなくＨＰが０となり霧散していく。

僕の技、地盃雷は自分のいた場所を感電のトラップゾーンに変える技だ。
敵が技の範囲に入れば、飛んでいる敵も電流が撃ち落とし感電させるが、敵が範囲に入らなければ意味がない。
それにＳＰの消費も１５と中々のため、多用はできないのが現状だ。

さてと後はあいつだな。

僕は未だに詠唱を続けているパドゥールを睨み付ける。
パドゥールはかなりの上空で詠唱しているが、ゲームの設定上、届かない範囲ではない。
ただ、当たっても単発攻撃になってしまう。
それではパドゥールの詠唱が終わる前に倒すことはできないだろう。

「姫路さんは炎の術でパドゥールを狙って。
秀吉は僕がパドゥールに攻撃するから手伝って」

「「はい（うむ）」」

僕と秀吉はパドゥールに向かって走り出す。
雄二と美波も片付いたらしく、パドゥール目掛けて走っている。

「みんないくよ！」

「「「おう（ええ）（うむ）！！」」」

僕たちはパドゥールにそれぞれ飛びかかる。

しかし術の詠唱が狙ったかのごとく、このタイミングで完了する。

空中にいる間は大した動きはできない。

それはパドゥールが貯めに貯めた術を真っ正面から受けるということだ。

できる限りの防御の体制をとる僕たち。

しかし知力の高い姫路さんならまだしも、僕たちが耐えきるのはほぼ不可能だ。

『外法術グラビティ・ハウリング』とパドゥールの上に表示される。おそらく、この術の名前だろう。

パドゥールから放たれる無数の黒い球体。

それぞれはてんでバラバラに飛ぶが、避けきれる量じゃない。

黒い球体が僕たちの体を貫いて――――――

貫かれてない！？

それどころか、黒い球体は僕たちの体に弾かれるように飛んでいっている。

一体なんで……

パドゥールの術に対抗する。
こんなことができるとすれば姫路さんしかいない。
僕は姫路さんの方を向くと、姫路さんの上には『アンチマジック』と表示されている。
効力の方は分からないけど、今パドゥールは術後硬直で動くことができない。
なら、今がチャンスだ！
せっかく姫路さんがつくってくれたチャンスを無駄にするわけにはいかない！
「くらえぇぇ、三牙連刃！（さんがれんじん）」
高速の三連撃がパドゥールを襲う。
「落ちやがれ、墜破！（ついは）」
雄二の拳が下へとパドゥールを引き落とす。
「逃がさんぞ、秋風の舞！」
落ちていくパドゥールが空中で薙刀を構え、回転する秀吉に切り刻まれる。
「いくわよ、崩剣！（ほうけん）」
美波が空中を切り裂くと、パドゥールの目の前に大きな剣が現れ、

攻撃する。

パドゥールはその衝撃によって後方の本棚に吹き飛ばされていく。
本棚の本がパドゥールを埋めていく。
しばらくは暴れていたが、下敷きになったパドゥールはそれっきり動くことはなかった。

「みなさん大丈夫ですか」

姫路さんがこっちに走り寄ってくる。

「うん、ウチらは平気よ」

美波が姫路さんに笑いかける。

「そういえば姫路さんはどうやってパドゥールの術を防いでくれたの？」

姫路さんが『アンチマジック』という術を使ったのは分かっているが、効力などがさっぱりなのだ。

「それはアンチマジックという、術を一度だけ無効にできる術を使ったんです。
明久君には炎を術を頼まれていたのですが、パドゥールの周りにあった魔方陣が変化したのでこっちを使っちゃいました。ごめんなさいね」

姫路さんが謝る事などないのだが、姫路さんの性格からして頼み事を守らなかったというのを気にしているのだろう。

「姫路さんが謝ることはないよ。
むしろ姫路さんが機転を利かせてくれなかったら、今頃僕らはいなくなってただろうからね」

そう、本当に危ないところだった。
もしあそこで『アンチマジック』の発動が遅れていたら、もし姫路さんが僕の言う通りに炎の術を使っていたら僕らは死んでいたんだ。
文字通り間近に死が迫っていたのだ。
僕は改めてこのゲームがただのゲームではないということを実感した気がした。

そして文月学園の他の生徒にも同様の危険が迫っていることも。

「今のが中ボスだと考えれば、ここのエリアももう一踏ん張りだな」

「そうじゃな。先を急ぐとするかのぅ」

僕らは再度歩き始める。
みんなを助けるために。
誰一人として犠牲を出さないために。

ＮＯＳＩＤＥ

乱雑に積まれた本の山。

その中から一つの本が飛び出す。

しかしそれは飛び出す時間を誤った。

なぜなら、そこには『黒衣の死神』の異名をもつ剣士がいたからだ。

「外法魔導書パドゥールか。ザコだな。
消えろ、十壊道走火（はしりび）」

剣士から放たれる一閃。

そこから一直線に炎の渦が魔導書に向かっていく。

魔導書は避けるすべもなく、ただその一撃で消え去った。

第十二話　外法魔導書（後書き）

ご恒例の技紹介です。

～地盃雷～
自信の足元に感電トラップゾーンをつくる技。
ただし、電撃が効かない相手や実体がない相手には効かない

～三牙連刃～
素早い上段、中段、下段の三連続攻撃をきめる技

～墜破～
対飛行系の砕破。
飛んでいる相手を打ち落とすのに最適

～秋風の舞～
薙刀を前に突きだし、空中で回転しながら敵を斬る技

～崩剣～
空中を斬り、対象の敵の前に巨大な剣を出現させ攻撃する技。（アニメ参照）
一見便利そうだが、タイムラグが生じるため、動けない相手以外には殆ど当たらない。

～アンチマジック～
一度だけ術を無効にする術。
ただし、回復術でも無効にしてしまうので考えなしには使えない。
更に一戦闘で一度きりというデメリットも抱えている

〜十壊道・走火〜
十壊道の内の一つである技。
一閃させた剣先からほとばしる炎を放つ技である。
剣自身も燃えているため、威力はかなり高い

では、次回もお楽しみ！

第十三話　冠する名（前書き）

ＰＶが１００００を突破いたしました。
読んでくださる方、評価してくださる方、感想をいれてくれる方、
お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます

第十三話　冠する名

「いかにもだな」

僕たちの目の前にそびえ立つ大きな扉を見て雄二が言う。

「やっぱりボス部屋かな？」

「鍵がかかってるし、そうだろうな」

扉をガチャガチャさせながら言う雄二。

「もしかして鍵ってあれでしょうか？」

姫路さんの指さした方に注目が集まる。

そこは扉の上で、小さな悪魔みたいなやつ（『キーデビル　ＨＰ１０』と表示されている）が鍵を持って笑っているのだ。

しかもジャンプしても届かない距離にいる。

キーデビルの方もそれをわかっていて、こちらを嘲り笑っているのだろう。

ザコのくせにムカつくやつだ！

憤慨する僕の肩を秀吉がちょんちょんと人差し指で叩く。

「明久よ、ここはわしに任せるのじゃ」

そう言うやいなや、秀吉は大きく跳躍する。

しかしキーデビルまでは届かない。
キーデビルの方もそれがわかっているため、動かない。

「くらうのじゃ、蒼天の舞！」

秀吉の薙刀が蒼いエフェクトに包まれる。
突如、キーデビルに届かないと思われた跳躍は勢い再び巻き返し、
そのままキーデビルへと向かっていく。
たかをくくっていたキーデビルは避けることもできずに直撃し、そ
のまま霧散する。

スタッ！

秀吉は着地すると満足気に笑う。

「空中戦なら、わしにお任せじゃ」

確かにリーチの長い薙刀なら空中戦も有利だろう。
なにより秀吉の修得技の大半が空中技だというのも大きな要因だ。

「でも木下、鍵はあそこよ」

美波が指さす場所、そこには扉のでっぱりに乗ってしまっている鍵
がある。

「ぬかったのじゃ……
あそこではわしの技が壁に当たって跳ね返されてしまうし困ったの
う」

姫路さんの術で落とすという手だてもあるが、万が一にも鍵が術で

壊れたなんて事態になったら笑い事ではすまされない。
なにかここにある物で鍵をとる方法は……
「そうだ、ほ「本を積み上げて鍵をとるぞ！」
僕のひらめきは雄二によってなかった事にされました……
みんなはもう本を取りに行ってしまっている……
「明久君も行きましょ？」
姫路さんが小首を傾け僕を誘う。
『誘う』といっても決して他意はないのでご了承願いたい。
僕的には他意があってくれた方が嬉しいんだけどね。
ヤバい、鼻血がでそう……
「うん、行こうか姫路さん」
僕は鼻を抑え、本の方へ向かう。

「はぁ、はぁ……」

隣を歩く姫路さんは息づかいが辛そうになってきている。
それもそうだろう、体の弱い姫路さんが自分の身の丈程もある本を抱えて往復3週もしているんだから。

べつに僕はなにもしてないからね。
というか、そんなこと姫路さんにやったら嫌われちゃうじゃないか。
できればやってみたいとは思いはするけど……ヤバい鼻血がぶり返してきた！？

「姫路さん少し休んでいていいよ。
姫路さんの分は僕がやっとくからさ」

僕は平静を装いながら、姫路さんを気遣う。

「これくらい大丈夫ですよ。
なにより私だけが休んでるなんてできませんから」

姫路さんは気丈に笑ってみせるが、その顔にははっきりと疲れの色が表れていた。

僕は姫路さんの分も持ってあげようと思い、一旦自分の分を置き、姫路さんの持つ本を引っ張る。

「ほら姫路さん、僕が持っててあげるから休んでてよ」

しかし姫路さんは頑として本を離そうとしない。
「嫌です。私だって明久君たちと一緒に運べます！」
「でもそんなに疲れてるじゃないか！」
「疲れてなんかいません！」
「いいや、疲れてるよ」
「私が大丈夫だと言ってますから、大丈夫なんです！」
なんで姫路さんはこんなに本を運ぶ事にこだわるんだろう？
姫路さんは人の為に笑い、泣き、頑張れる優しい人だし、やると決めた事はやり通す我の強い一面もあるけどなにかおかしい。
具体的には指摘できないけど、違和感がある。
「離してください、明久君！」
姫路さんが一際大きな力で引っ張る。
すると本は僕の手を離れ、更に姫路さんの手からも離れ、大きく宙を舞った後、床に落ちる。
そして本の落ちた床は取り付けが甘かったのか、衝撃で板の片一方がシーソーの要領で跳ね上がり、別の本を飛ばす。
飛んでいった本は扉の上のでっぱりに当たって
チャリン♪
「「「「「えっ？」」」」」

見事に5人でハモる。
それもそうだろう、鍵をとろうと積み上げてた本の山の前に鍵が落ちてきたのだから。
鍵を拾う雄二。
本を持ちながら唖然とする美波と秀吉。
そして自分たちのやったことの結果が信じられるずに互いに見つめ合う僕と姫路さん。
「明久君、鍵はとれたんですよね？」
「……うん。雄二が持ってるよ」
僕は未だに信じられず自信なさげにこたえる。
「まさかこうなるなんて思いませんでした……」
「僕だってビックリだよ」
しばしの沈黙。
なんだか、こう見つめ合ってると恋人同士みたいだ。
もちろん僕と姫路さんじゃ釣り合う訳がないんだけど……
「おい、お前らは何回俺に見せつければ気がすむんだ」
雄二に指摘され、僕たちはお互いに正反対を向く。
多分、今の僕の顔は真っ赤だろう。

ヤバい、雄二に姫路さんと見つめあってるの見られた……
後でなんて言って弄られるんだろう……

「鍵は手に入ったんだから行くぞ。
ほら、島田に秀吉も固まってないで動け」

雄二の掛け声でみんなが一斉に動き始める。

「姫路さん、さっきはごめんね」

横に並ぶ姫路さんにさっきの事を謝罪する。

「私の方こそごめんなさい。
それと、このエリアが終わったら明久君にお話したいことがありますので時間いただけますか？」

「うん、べつにいいよ」

姫路さんが僕に話ってなんだろう？
そう疑問に思いながらも、断る必要もないので了承する。

扉の奥は本棚に囲まれた円い部屋だった。
中央の机には紫のローブを着用し、立派な白い髭をたくわえた老人がいる。
「来たか」
しわがれているが、よく通る声が部屋にこだまする。
「あんたがここのボスか？」
僕たちよりも一歩前に出た雄二に問う。
すでに身構えているところを見ると、僕も警戒したほうがよさそうだ。
「いかにも。
わしがここの長であり、ＶＣをもつエクスダリオンじゃ」
「エクスダリオンって……」
僕の呟きにエクスダリオンは頷く。
「うむ、ここ魔導図書館はわしの知識を有した図書館じゃ。
ゆえにわしの名を冠しておる」
この図書館がこいつの知識だって！？
冗談じゃない、身の丈サイズの書物が幾千幾万も内蔵しているんだから膨大すぎる知識量だ。

「どうした、かかってこぬのか？
それともＶＣがいらぬのか？」
エクスダリオンが挑発するように雄二の顔を覗き込む。
「言われなくてもやってやるよ。
ただ、あんたの知識を見込んで俺たちが勝ったら、いくつか質問に答えてほしい」
雄二の提示した条件にエクスダリオンは頷く。
「よかろう。では始めるぞ」
僕たちの初めてのボス戦が始まった

第十三話　冠する名（後書き）

ついに次回エクスダリオン編のボス戦！

魔導図書館の知識を有する彼に明久君たちはどう立ち向かうのか！？

次回もお楽しみください

第十四話　激闘エクスダリオン！

開戦の言葉と共にエクスダリオンの姿が僕たちの目の前から消える。

僕は隣に並ぶ姫路さんを護るように前にでる。

美波も秀吉と比べて前衛向きのためか、秀吉の前に出て周りに警戒している。

ただ、雄二は僕たちの方に向き直っただけで一歩も動いていない。

「島田、後ろだ！」

雄二の合図で美波が後ろに剣を振るう。

その太刀筋はエクスダリオンをとらえたかのように見えたが、エクスダリオンの姿はかき消すように消えてしまった。

「ふぉふぉふぉふぉ、中々の太刀筋じゃが、その程度ではわしをとらえられんよ」

エクスダリオンの声だけが響く。

次はどこからくる？

「ほれ、わしはこちらじゃ」

上空からの声に振り向くと、エクスダリオンが詠唱を始めていた。

空中で詠唱をすれば阻害されにくいとふんだのだろう。
だけど空中なら秀吉の専門分野だ。
「いくのじゃ！」
秀吉がエクスダリオンに向かって跳躍する。
その時、エクスダリオンの上に『Ｓｋｉｌｌ　高速詠唱』と表示されると共に詠唱が完了する。
「煉獄の業火よ、ヘルフレア！」
エクスダリオンから特大の火球が打ち出される。
それは跳躍した秀吉目掛けて飛んでいく。
「間に合って、崩剣！」
空を裂く美波の斬撃が、秀吉と火球の間に割って入る巨大な剣へと変わる。
剣が火球と衝突して、幾分か火力が落ちる。
だが、まだ威力は十分だ。
火球はそのまま秀吉を包み込む。
バタッ！！
床に落ちる秀吉。
幸い、ＨＰの方は３７と多少残っているが、次の攻撃には耐えられ

ないだろう。

「木下君今助けます、ヒール！」

姫路さんの回復呪文がすかさず入り、秀吉の傷はみるみる塞がる。

「すまぬのじゃ、姫路に島田よ」

立ち上がりながら、謝罪をいれる秀吉。

「木下は下がってなさい。
あんたの仇はウチがとってあげるから」

美波、まだ秀吉は死んでないよ。

ズゴォーン！！

突然おきた轟音に目を向けると、エクスダリオンが本の山に埋もれていた。

「余所見するもんじゃねえぜ」

雄二が得意気に腕捲りしながら言う。

「ふぉっふぉ、たしかにお主の言う通りじゃな」

エクスダリオンが本の山から出てくる。
その上に『大魔導師エクスダリオン　ＨＰ１８９６』と表示される。
ここにきて始めて、敵の情報が公開されたけど、いつもより公開が遅いのはエクスダリオンがボスだからなのか、はたまた別の理由が

あるかは分からない。
ただいえることは、パドゥールよりも強敵だってことだ。
「ふぉっふぉ、ではこれはどうじゃ？」
エクスダリオンが杖で床をコツンと叩く。
乾いた音が部屋に響くと同時にエクスダリオンが3人に増える。
「では、いくぞい」
それぞれのエクスダリオンが消える。
次はいったい、どこから来る？
3人分の警戒をしなきゃなんだから、広く浅く見渡さないと……
見回す僕の視界に、雄二を取り囲むように現れる3人のエクスダリオンが映る。
しまった、3人に増えたからといって、バラバラに攻撃してくる保証はなかったのに油断してた！
「雄二、囲まれてるよ！」
しかし、雄二は僕の掛け声をいれた頃にはもう飛び上がっていた。
「ジジィ、そんなせこい手が俺に通用するかよ！」
雄二の言葉から察するに初めからエクスダリオンの意図に気づいて

いたのだろう。

「ふぉっふぉ、しかし空中ではお主は無防備じゃぞ」

そう、空中にいる雄二はエクスダリオンのかっこうの的だ。
３人のエクスダリオンが空中にいる雄二に杖を構える。

「少年よ、己の無策を悔やむのじゃ、ぐべるぁ！」

僕は一番近くにいたエクスダリオンを攻撃した。
相手の注意が全員、雄二に向いていたため、容易に攻撃が当たるのだ。

そして、一人の詠唱が中断されたことにより残りの二人の注意が僕に逸れる。

「余所見すんなって言ってんだろうが、剛烈破！（ごうれつは）」

狙ったかのごとく雄二は空中から技を決める。
雄二の拳はエクスダリオンには当たらず地を砕く。
しかし、当たらずしてもその力は絶大であり、エクスダリオンは衝撃によって石片と共に飛ばされる。

３人いたエクスダリオンは１人に戻り、ＨＰも１００２と大幅に減っていた。
おそらく３人分のダメージをおったのだろう。

しかし、まだＨＰが半分以上残っているため、エクスダリオンは余裕で立ち上がる。

「ふぉふぉふぉふぉ、お主は仲間を信頼しておるのじゃな。
あそこで小僧が飛び出さねば、お主が死んでおっただろうに」
未だに余裕なエクスダリオンに雄二は僕の方を指差して言う。
「違うな。
こいつはバカだから狙えると思ったら、なにも考えずに突っ込むだけだ！」
「雄二、助けてあげたのにその言い種はなんだよ！」
なんて酷いやつだ。
こんな事なら助けなければよかった。
「ふぉふぉふぉふぉ、ならお主は軍師といったところじゃな」
「あんたにそう言われるなら光栄だな」
雄二はいつもの余裕な表情を崩さない。
「しかしお主がいかに優れた軍師とて、駒がなければ勤まらんに」
エクスダリオンの言葉にはっとする雄二。
「明久、こいつは幻覚だ！本物はお前の後ろだ！」
雄二が僕に叫ぶ。
「少年よ、余所見をしておると嬢ちゃんを護れんぞ？」

「！？」

突如、後ろから聞こえた声に振り向くが、もう遅かった。

「地を這う蛇（じゃ）よ仇（あだ）をなせ、ジアース！！」

術の発動と共に、僕の足元の地面から土で構成された槍が現れる。

よけようと後ろに跳躍するが、右足にかすってしまった。

まずい、右足の神経を切られたらしくうまく動けない。

そんな僕を追撃するかのごとく、土でできた槍がもう一本現れ、宙に上がり僕の方へ向かってくる。

僕は少しでもダメージを軽減しようと武器を横に構え、迎え撃つ体勢にはいる。

「大切剣！（だいせつけん）」

聞きなれない技名と共に、土の槍が消える。

エクスダリオンの方を見ると、なんとそこには姫路さんとエクスダリオンがつばぜっていた。

「ほほぅ、ただ護られておるだけのお姫様じゃないということじゃな」

エクスダリオンが姫路さんを少し押し返す。

「私はお姫様なんかじゃありません！」

姫路さんが巻き返す。

「しかし嬢ちゃんが望まぬとも周りが嬢ちゃんを特別扱いするもんさ」

エクスダリオンに押され、姫路さんの重心が傾く。

クソッ、今すぐ助けに行きたいのに足が動かない。

こんな時に僕は何をやってるんだ。

「それでも私は明久君たちと同じなんです。

なにも特別な存在なんかじゃありません！」

姫路さん……

姫路さんの言葉が胸に突き刺さる。

僕は今までなんど姫路さんだからという理由で彼女を扱ってきただろう？

さっきの本を運ぶときだってそうだ。

僕は姫路さんに良かれと思ってやったことだけど、姫路さんにとっては『特別扱い』だったのかもしれない。

僕はいったい知らない内に何度姫路さんを傷付けてきたんだろう？

何度悲しませてきたんだろう？

何度辛い思いをさせてきたんだろう？

謝ろう。

もしこの戦いに勝てたら、姫路さんに今までのこと全てを。

僕が追想から戻ってくると同時に姫路さんが一気にエクスダリオンを押し返す。

押しきった姫路さんの『大切剣』が発動し、エクスダリオンを吹き飛ばす。

ズゴォーーーン！！

エクスダリオンは本棚まで飛ばされ、更に衝撃によって倒れた本棚の下敷きになる。

おそらく今の一撃でかなりの体力を削っただろうが、まだ生きてはいるだろう。

「明久君、大丈夫ですか！？」

姫路さんがこちらに走り寄ってくる。

「ダメだよ姫路さん。

まだエクスダリオンが生きてるかもしれないんだから警戒しないと」

幸い、エクスダリオンは未だに本棚の下敷きになっているが、いつ起き上がるかわからない。

「そんなことよりも明久君の治療が優先です」

しかし姫路さんは僕の制止を聞かず、回復呪文を唱え始める。

「生命の息吹よここに宿らん、ヒール！」

温かな光が僕を包む。

姫路さんの優しさと同じ温かさだ。

心地いい……

できることならば、全てを手放し、この温もりの中で眠っていたい。

だけど、今はするべきことがある。

「姫路さんありがとう」

この戦いに勝って、姫路さんに言わなきゃいけないことがあるんだ！

立ち上がり、姫路さんの前に立つと同時に、エクスダリオンも本棚を持ち上げて戦線復帰してきた。

この闘い負けるわけにはいかない！！

第十四話　激闘エクスダリオン！（後書き）

激闘の最中、悩む明久。
自分のしてきたことは本当に姫路さんのためになっていたのか？

伝えたい想いと気持ち、そして謝罪

次回、意外な決着が！？

第十五話　終戦と救出と君に誓う言葉（前書き）

遂にエクスダリオン編最終回！
今回はかなり急ぎ足となっております

第十五話　終戦と救出と君に誓う言葉

「降参じゃ」

「「「「「はっ（えっ）？」」」」」

意外な言葉に驚愕する僕たち。
エクスダリオンの方を見るがＨＰはまだ８７６も残っている。

「いやのぅ、わしは嬢ちゃんがただ護られているだけのお姫様だと思っておったから勝てると思ったんじゃが、どうやら勘違いだったらしくてのぅ。
これではわしがいくら術をうとうとも、嬢ちゃんが回復させてしまうから無駄骨というものじゃ。
なにより本気になった少年にの相手は老体には荷が重すぎる」

エクスダリオンが僕の方を見て言う。

「お主は先までとは目付きが滅法変わっておる。
どうやら、わし自らスイッチを入れてしまったようじゃがな」

そんなに僕の目付きは変わっていたんだろうか？
第一、僕一人でエクスダリオンをどうにかできるとは思わないけどなぁ……

「まぁ、賢明な判断だな。
スイッチの入ったこいつを止められるのは一人だけだし、俺たちからしてみればあんたがＶＣさえくれれば文句はねえからな」

なぜ雄二は前半部分を僕と姫路さんを見ながら言うんだろう？
「当然ＶＣはやるぞ。
わしも命がおしいからのぅ」
「交渉成立だ」
満足気に笑う雄二。
「そうじゃ、このエリアで戦死した者たちを持って帰ってくれ」
そう言うと、エクスダリオンは杖で床を叩く。
「うわぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ズドォーーーン！
「須川！？」
僕たちは上から降ってきた須川＋ＦＦＦ団の面子に駆け寄る。
「ん？
秀吉に姫路さんに島田にブサイク二人、どうした？」
ＦＦＦ団の面子が口を揃えて言う。
「やっぱりこいつら、戦死したままでいいです」
こいつらは生かしておく価値なんかないんだ！

「明久君、それじゃあ須川君たちが死んじゃいます！」
「それに明久よ、話が長くなるからそこまでにするのじゃ」
姫路さんと秀吉の（ある意味冷静な）制止に従いひとまず須川たちに今の状況を説明する。

「――――という訳だから、ログアウトして帰っていいよ」
もう須川たちともパーティーを組んだからログアウトできる筈だ。
「そうだな。
一度ログアウトさせてもらってから、再度やって来るよ」
「いや、普通に現実世界にいてくれていいんだけど……」
正直、Ｆクラスのメンバーと冒険したら命がいくつあっても足りない。
「俺たちは俺たちで行動する。坂本も人手が多い方がいいだろ？」
「そうだな、確かに人手が多い方がいいだろうからそうしてくれると助かる」
なにかを考えながら言う雄二。

なにか引っ掛かるところでもあるんだろうか？

「じゃあ、俺たちは一度戻るな」

そう言い残し、須川たちはログアウトしていった。

「じゃっ、約束の物をもらうとするぜ、じいさん？」

雄二はエクスダリオンに向き直りながら言う。

「うむ、受けとるがよい」

エクスダリオンの杖から光が放たれる。

その光は雄二の前で止まると一枚のコインとなった。

独特の紋様のはいった銀色のコインだ。

これがＶＣなんだろう。

「確かにもらったぜ」

雄二が道具リストにＶＣがあるのを確認しながら言う。

「で、質問はどうするのじゃ？」

戦闘前に交わした契約の事だ。

エクスダリオンの問いに雄二が一歩前に出る。

「まずは俺からだ。あんたは何者だ？」

雄二はなにを聞いているんだろう？

この老人はここのボスのエクスダリオンなのに……

「ほほぅ、お主どこまでわかっておる？」

エクスダリオンの返答も僕の考えていたのと違ったこたえだ。

「あんたがＰＣでもＮＰＣでもないってことだけだな。
あんたがＮＰＣだったら、戦闘前に俺と約束をすることなんてできないからな」

ＰＣとは僕たちみたいにゲームをプレイしている人の総称で、ＮＰＣとはゲームに組み込まれている動かす人がいないキャラの事だ。

要するに、ＰＣならボスをやっているはずないし、一定のデータ通りに動くＮＰＣなら戦闘前に約束なんてできないってことだろう。

「いかにも。
わしはＰＣでもＮＰＣでもなく、このゲームの自警システムじゃ。
それゆえ、人格が設定されており、お主らと会話ができる」

そこからしばらく問答が繰り広げられる。

話を要約すれば、エクスダリオンはＰＣのように動く自警システムであり、記憶なども有している。
更には僕らと同じで死ぬこともあるらしい。

「じゃあ、最後の質問だ。
あんたは、今この世界で起きている危機をどこまで感知してる？」

この世界の危機とは、学園長にメールをよこした人物のしでかした

事だ。

「おそらくお主らの誰よりも知っておろう。
しかし今のお主らには教えられん。
なんせ手に負いきれんじゃろうし、今はＶＣを集める事に専念するんじゃな」

「そうか、ならいい」

すんなりとひく雄二。

「それと嬢ちゃん、ちとこちにきぃ」

エクスダリオンが姫路さんに手招きをする。

「私ですか？」

「うむ、嬢ちゃんであっておる」

エクスダリオンの方へ駆けていく姫路さん。
なにを話に行くんだろう？

姫路さんＳＩＤＥ

私はエクスダリオンさんに呼ばれてそちらに行きました。

「嬢ちゃんよ、今からわしが言うことをしっかりと心に留めておくのじゃ」

エクスダリオンさんの小さいけど真剣な声に私は頷きます。

「あの剣を持っておる少年がこの先、道を踏み外すやもしれん。
その時は嬢ちゃんが少年を正しい道に戻すのじゃ。
これは嬢ちゃんにしかできんことだから頼んだぞ」

少年とは明久君の事でしょうけど、私に明久君を動かす力なんて……
第一、明久君が道を踏み外すなんて思えませんし……

「ほれみなが待っておろう、戻ってよいぞ」

「あっ、わかりました。できるかぎり頑張ってますね」

私は明久君たちの所へと戻ります。

早く戻って、明久君と……

「嬢ちゃんがどう足掻こうとも、少年にとって嬢ちゃんは特別なんじゃよ」

私の後ろでエクスダリオンさんがなにか呟いた気がしましたが、自分の足音でうまく聞こえませんでした。

明久ＳＩＤＥ

エクスダリオンのもとを後にした僕たちは、あの街のフラッグ(ゲートタウンというらしい)だかというものがあった高台に来ていた。
雄二たちはアイテムの調達に行くらしく、今は姫路さんと二人っきりだ。

姫路さんがエクスダリオンとなにを話してきたのか気になるが、聞くのはデリカシーが無さすぎるだろう。
なにより、僕の頭の中は姫路さんにどう謝るかでいっぱいだった。

「きれいですね」

姫路さんが夕日に照らされる街並みを一望しながら言う。
こちらからは顔が見えないけれど、今姫路さんは笑っているんだろう。
なぜだかそう確信できた。

「そうだね」

僕の肯定の相槌に姫路さんが振り向く。
やっぱり、その顔は笑っていた。

心が安らぐ優しい笑顔

そうか……
僕はこの景色を姫路さんに見せたくて、いいや笑ってほしくてここに連れてきたんだ……

なんというか、自分がしていることなのに理由が分からなかったなんて滑稽な話だ。

「明久君、その話なんですが……」
姫路さんが申し訳なさそうに上目遣いできりだしてくる。
いよいよ本題にはいるわけだが、姫路さんの言いたいことは大方分かっている。
『特別扱い』しないでほしいというものだろう。
だから僕は姫路さんに手で「待って」の合図をする。
「ごめん、姫路さん。
僕、姫路さんだけを特別に扱うことを気にしてるなんて知らなかった」
深く頭を下げ謝る。
「明久君……」
「僕は姫路さんに良かれと思ってやってきたことも、姫路さんにとっては苦痛だったかもしれない」
だったかもしれないじゃなく、だったんだ。
エクスダリオン戦の時に自覚したはずじゃないか。
なのに、こうやって逃げ道をつくるなんて僕は卑怯者だ……
「明久君、顔を上げてください」
姫路さんの優しい声に顔をあげる。
姫路さんはいつのまにか、街の方を向いてしまっており、顔が見えない。

「確かに明久君の『優しさ』を辛く思ったこともあります」
こんな僕の身勝手な『特別扱い』を『優しさ』と言ってくれる姫路さんの『優しさ』に目が潤む。
「私もみんなと同じように扱ってほしいと思ったこともあります」
やっぱり、僕は姫路さんを傷つけてきてたんだ……
姫路さんへの申し訳なさで目が潤む。
「だけど、明久君と一緒にいることを辛いなんて思ったことは一度もありませんよ」
姫路さんは長く軟らかそうな髪を翻し振り向く。
その顔は夕日に涙が照らされていた。
「姫路さん……」
次の一言が紡げない。
正確に言えば、用意してあった言葉が全て頭の中から抜けてしまったんだ。
でも、それでいいんだ。
用意してあった言葉よりも、今思っていることを素直に伝えよう。
「僕のせいで姫路さんが傷ついたのは理解してるつもりだ。
だけど多分、これからも気づかない内にそういう事があると思う」

ここまで言って一呼吸いれる。

「でも、僕は姫路さんといたいんだ。一緒に笑って、泣いて、怒って、頑張って、思い出をつくっていきたいんだ！」

「明久君……」

言ってしまった……

聞きようによっては告白ともとれる言葉。

でも紛れもない、僕の本心。

姫路さんにとっては迷惑だろうけど、これが僕の本心なんだ。

「私も……

私も明久君といたいですし、たくさん思い出をつくっていきたいです」

面と向かって言われると恥ずかしくて目をそらしてしまう。

「僕のわがままを聞き入れてくれてありがとう……」

姫路さんに酷い事をしておいて、一緒にいたいなんてわがまま以外のなにでもないだろう。

「なら、私の明久君と一緒にいたいというわがままも聞いてくれます？」

悪戯っぽくわらう姫路さんの顔には、もう涙はなく、笑顔だけがあった。

「もちろんだよ」

「ふふっ、お相子ですね」

無邪気に笑う姫路さんの顔からは悩みの色が消えていた。
きっと、こんな小さな事でも対等という事が嬉しいのだろう。

こんな僕とでも……

本当なら僕みたいな人より、もっとできた人と対等の方がいいはずなのに、姫路さんは本当に嬉しそうだった。
そう、とてもきれいな笑顔だったんだ。

この笑顔をいつまでも側で見ていたいと思った。

君の笑顔を護りたいと願った。

君がいてくれる。ただ、それだけでいい。

だから君を護るためなら、全てを敵にまわそう……

夕日に照らされながら、僕は密かに誓った。

第十五話　終戦と救出と君に誓う言葉（後書き）

『特別扱い』される姫路さんの悲しみと向き合い、解決した明久。
そして一人、姫路さんを護る事を密かに誓う。

今回でエクスダリオン編は終了となります。
次章からは、あの人嫁やキノコ、はたまたブラを被ったあの人が出てくる予定です。
では、次回をお楽しみに

第十六話　坂本家の妻（前書き）

今回から新章突入です。お楽しみください。

第十六話　坂本家の妻

「雄二、幸せそうだね」

僕は今しがた合流した雄二を嘲笑する。

「この状況を見て、そう言えるお前の神経を疑いたい」

手枷をされながら、呆れたように雄二は言う。

当然、雄二が手枷をされているのだから霧島さんも、もれなく着いてきている。

ただ……

「翔子ちゃん、なんでここにいるんですか！？」

別に姫路さんに悪気があって言っている訳ではなく、純粋に疑問を抱いているのだ。

「……雄二がいるならどこにでも現れる。雄二がいないならどこにも現れない」

多分、姫路さんの期待した答えにかすってもない……

「さすがにどこにも現れないは無理だろ！？」

雄二の叫びに僕も頷く。

いくら霧島さんといえども、消えることは無理だろう……

「じゃあ、雄二をこの街で待ってた」

「じゃあ」というのは色々と気になるけど霧島さんだから仕方がない。

そんな事があって、霧島さんと合流したのだが、雄二がいれば後はどうでもいいらしく、一緒に行動するようになった。

「って、訳で恒例のステータス確認でもしようか？」

「……わかった」

霧島さんが頷き、ステータス画面を開く。

一度も迷わずステータス画面を開けるのはすごいと思う。

〜霧島翔子〜

職業　雄二大好き愛してる全部大好き絶対に離さない私だけのもの

誰にも邪魔させない

「ストォーープ！！」

初めてステータス画面をみおわる前に止めたよ……

「……どうしたの吉井？」

止められた理由が分からないという風に霧島さんは首を傾げる。

「さすがに色々とヤバイでしょ！？

というか雄二もなんか言ったらどうなの！？」

いくら霧島さんが雄二の事が好きでも、職業欄でこれはやりすぎだと思う。

「ふっ、今更こんな事で騒いでられるかよ……」

悟ったように言う雄二の目は七割方死んでいた……

「じゃあ、続き」

霧島さんが再度、ステータス画面を開く。

～霧島翔子～

職業　雄二大好き愛してる全部大好き絶対に離さない私だけのもの
誰にも邪魔させない

ＨＰ　９５
ＳＰ　６５
攻撃力　４５
防御力　３５
素早さ　２０
知　力　１０５
機動力　２５

Ｅ　日本刀
Ｅ　甲冑

日本刀は霧島さんの召喚獣が持っているものを、霧島さんのサイズ

にあわせたものだ。
スラリとした細身の剣が優雅さを感じさせるつくりなっている。
「ステータス的に十分、前衛で闘えそうだね」
「……雄二と一緒」
どうやら霧島さんの眼中にあるのは、その事だけらしい。
「知力も私より高いですから、後衛もできますね」
姫路さんが霧島さんに笑いかける。
「うん、瑞希の手伝いもする。だけど、私は回復呪文がない……」
霧島さんが技欄を開きながら説明する。
「覚えておる技は、『ダーク』・『炎撃刀(えんげきとう)』・『雷撃刀(らいげきとう)』と確かに回復呪文があらんのぅ」
秀吉の呟きにみんなで頷く。
「でも技は全部属性技みたいだから、知力があるに越したことはないんじゃないかしら?」
確かに美波の言う通りだ。
このゲームでの知力は呪文以外にも、属性のついた技の威力にも影響を及ぼす。
「まっ、とにかく戦力が増えたなら、それでいいだろ?」

いつの間にか復活した雄二がしめて、この話はお開きとなった。

次のエリアに移動するため、僕たちは門の前までやって来た。

「行くなら、なるべくヤバそうな名称の所だな。
もし、そのエリアに飛ばされたやつがいるなら速急に助ける必要があるからな」

雄二の提案は最もだ。

「前回は私のわがままで決めてしまいすいません……」

姫路さんが申し訳無さそうに言う。
多分、エクスダリオンに行くよりも先に、こういった所に行った方が良かったのではないかと後悔しているんだろう。

「そんなことないわよ。
瑞希があそこを選んでくれなかったら、ウチらは死んでたのかもしれないのよ」

美波が姫路さんを慰める。

「そうじゃ、わしらは姫路のおかげで助かったのじゃぞ」

「……瑞希の判断は間違ってない」

「俺も姫路を傷つける気はなかったんだ。すまん」

雄二が頭を下げる。

「ね、みんなもこう言ってるし、気にすることないよ」

僕は姫路さんに笑いかける。

「みんな、ありがとうございますね」

暗い顔から一転して、笑顔になった姫路さんにつられて、みんなが笑顔になる。

やっぱり姫路さんは笑顔が一番だ。

幸せそうな笑顔を見てそう思う。

だけど、この時の僕は知らなかったんだ。

後にこの笑顔が僕を、僕たちを変えることを……

第十六話　坂本家の妻（後書き）

ほとんど話を聞かずに着いてきた翔子。大丈夫か！？
そして次回から、ヤバそうなエリア！？
次回もお楽しみに！

第十六話　狂乱の都ディアーナ

狂乱の都ディアーナ

それが、僕たちのやって来たエリアの名前だ。
名前だけでもヤバそうなのに、街はスラムのようなところで、唯一まともなのは遠方に見える城だけだ。
そして、このエリアに来た時に雄二たちと離ればなれになってしまっているため、今は姫路さんと僕とで行動している。

「ゴホッ、ゴホッ」

姫路さんが苦しそうに咳き込む。
こんなほこりが舞うような劣悪な環境の街では仕方のないことだろう。

「姫路さん大丈夫？」

「大丈夫です……ゴホッ、ゴホッ」

苦しそうにする姫路さんを見て胸が痛む。
本来なら「ゲートタウンに戻っててもいいよ」等の言葉をかけてあげたいのだが、果たしてそれが『特別扱い』にならないか心配なのだ。
もう姫路さんに辛い思いはさせたくないんだ……

「明久君、行きましょう……」

苦しそうに歩き始める姫路さんについて歩く。
今すぐにでも手を貸してあげたい。
いつもみたいに気を使いたい。
そう思うのは僕のわがままだろう。

バンッ！！
突然の肩への衝撃によろける。
見ると、そこにはこの街に似合いそうなゴロツキがいた。
「おいおい兄ちゃんよぉ、喧嘩うってんのかあぁん！？」
なんとも典型的なセリフに呆れながらも、姫路さんを庇うように前にでる。
でも、こうやって姫路さんを庇うのも『特別扱い』なんじゃ……
「ボケッとしてんじゃねぇぞ！！」
ゴロツキが金属の棒でなぐってくる。
僕はそれを間一髪で剣で受け止める。
「いいもん持ってんじゃねぇか？
どうだ、それをくれたらこの場は見逃してやるぜ？」
試すような目でこちらを見るゴロツキ。
ここで断れば最悪、姫路さんにも被害が及ぶだろう。

「わかった。だからひめ「ちょっと待ったぁぁぁ！！」

突然、後方から聞こえた図太い声に振り向く。
そこには、筋骨隆々の体、右手に持っている鉄球、口元を隠すマスクといった、荒くれのボスみたいなやつが走ってきていた。
まずい、このままじゃ……

「ランドルフ、てめぇまた痛い目みてぇのか！？」

「かっ、かしら！？」

ランドルフと呼ばれた、僕に絡んできたやつは即座に土下座の体勢に切り替えた。
つばぜり合いの体勢が解けた僕は気が抜けてしまい、その場にへたれこんでしまう。

よかった、敵ではないみたいだ……

「明久君、大丈夫ですか！？」

姫路さんが膝に両手をついて心配そうに尋ねてくる。

「あはははは、大丈夫だよ。
ちょっと気が抜けただけだからさ」

姫路さんを心配させまいと気丈に振る舞う。

「取り込み中悪いが、ウチの若いもんが迷惑をかけたようだ。すまんな」

かしらと呼ばれた大男がランドルフを右足に踏みながら謝罪してくる。

「いや、こちらこそ危ないところをありがとうございました」

この危なそうな大男を刺激しまいと、慎重に言葉を選ぶ。

「俺はこのスラム街を統治しているホーガンってもんだ」

「僕は吉井明久といいまして、こちらが姫路瑞希といいます」

自己紹介に対して自己紹介で返す。

姫路さんはホーガンが怖いのか、僕の後ろに隠れるようにしている。

これは僕が『特別扱い』した訳じゃなくて姫路さんが僕を頼っただけだから、姫路さんを庇ったって傷つくことはないよね

安堵と同時に、心置きなく姫路さんを庇えることに安らぎを覚える自分がいることに気づく。

「そんな嬢ちゃん連れて、この街歩くのは危ねぇからひとまず俺の所に来ないか？

ランドルフのバカがやった詫びもしてぇしな」

ホーガンの意外な優しさに驚きながら、後ろの姫路さんと目を合わせる。

姫路さんは頷いて了承の意を表す。

「では、お願いしますホーガンさん」

「よっ、よろしくお願いいたします」
姫路さんも僕の後ろから横に移動して頭を下げる。
「なぁに、そんな固くなるこたぁねえ。仲良くやっていこうや」
ホーガンがランドルフから足をおろす。
「かしら、いくらなんでもいてぇですよ」
「てめぇが、恐喝なんかしようとするのがいけねぇんだろうが！」
ホーガンに睨み付けられてランドルフは萎縮してしまう。
そんなランドルフに姫路さんが近づき詠唱を始めた。
「えっ、ちょっと嬢ちゃん待った！？兄ちゃんにはもう絡まねぇから呪文はうたないでくれ！！」
ランドルフはなにかを勘違いしたらしくかなり慌てている。
姫路さんもランドルフが勘違いしてると分かっているらしく詠唱を続け、ヒールを行使する。
ランドルフが光に包まれていく。
「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
って、あれ？傷が治ってる！？」
「こいつは驚いたな。
嬢ちゃんは神術の使い手だったとは……」
驚くランドルフとホーガン。

「あのぅ、神術ってなんでしょうか？」
姫路さんが恐る恐る右手を上げてたずねる。
「なんだ、嬢ちゃんは神術がなにかわかんなくて使ってんのか？」
ランドルフが一層驚き、たずねるの対して、姫路さんは「はい」とだけ反応する。
「神術ってんのはアイテムもなしに回復させちまう神の術よぉ。これを使えるやつなんてそうそういるもんじゃねぇ」
要するにただの回復呪文らしい……
それとも回復呪文ってそんなに珍しいんだろうか？
確かに僕らのパーティーでは姫路さんしか使えないけど……
カンカンカンカンカンカン！！
突然、古い鐘を鳴らしたような音が街中に鳴り響く。
「ちっ、またあいつらか。
ランドルフ、この二人を連れて先に集会所に行ってろ！」
「へいっ、かしら！」
走り出すホーガン。
それを見送ったランドルフは僕らの背中をおす。
「えっと……ヨシイにヒメジだったか？」

ランドルフの言葉に僕と姫路さんはうなずく。
「集会所に案内するからついてこい」
「ホーガンさんはどこに行ったんですか？」
僕は集会所に行く前に気になっていたことを聞く。
「かしらは帝国の犬どもか、街に入り込んだ魔物でも追い払いに行ったんだ」
帝国の犬というのは恐らく軍のことだろう。
ホーガンたちが軍とどういう関係か知らないが、魔物が街に入り込んでいるなら一大事だ！
「明久君」
姫路さんも同じことを考えていたらしい。
「うん、行こう姫路さん」
走り出す僕ら。
それについてくるランドルフ。
「おい、戻れよ。
かしらに任せときゃぁ、帝国の犬だろうが、魔物だろうが安心だからよぉ」
「だとしても目の前の出来事を黙って見過ごす訳にはいかないじゃ

ないか！」

「私も誰かに頼ってばかりじゃ、護られてばかりじゃいけないと思うんです！」

姫路さんは声を張り上げて言う。

その言葉は誰に対してのものだろう？

『特別扱い』した僕に対して？

みんなと対等でありたいという願いに対して？

それとも、純粋に今の状況に対してなのか、僕には分からない。

だけど、姫路さんが僕の助けがいらないなら……

「オラオラオラァァァァ！！」

広場に着いた僕たちの視界に鉄球を軽々と振り回し、空を飛ぶ怪鳥を打ち倒すホーガンが映る。

その姿は正に悪鬼というもので、さっきの事があっても、こんなやつに街の統治を任せて大丈夫だろうかという疑問がわく。

「はんっ、お前らがこの街に入ってくる隙なんざぁねぇんだよぉ！」

次々と怪鳥を打ち倒すホーガンだが、さっきから一度も技を使っていない。

「なっ？かしらに加勢なんていらねぇだろ？」

ランドルフの言葉に僕たち二人はうなずく。

「これで最後だ！！」

ホーガンが一際は大きく鉄球を回すと、彼を取り囲んでいた魔物は全て鉄球の餌食となり、霧散していった。

「おうランドルフ、なにやってんだ？」

ホーガンが肩に鉄球を下げながら、こちらに歩いてくる。

「あっしはこいつらを止めたんですが、かしらの加勢に行くって聞かなくて……」

ランドルフの言葉に返す言葉もない僕たちは押し黙る。

「なぁに、ヨシイにヒメジも気にするこたぁねぇ。
誰も犠牲者が出てないなら結果オーライってな。ガハハハハ」

豪快に笑うホーガンの顔は何も気にしていないという風だった。
見た目は荒くれだけど、心の方は寛容でいいやつなのかもしれない。

「（ホーガンさんって、思ってたより恐い人じゃありませんね。恐がったりしてしまって悪い気がします……）」

小声で耳打ちしてくる姫路さんにうなずく。

「（多分、ホーガンは姫路さんが恐がってたことなんてしらないと思うよ）」

「なんだ、カップルで内緒話か？みせつけてくれるじゃねぇか？」

「ちっ、違いますよ。
僕と姫路さんはカップルなんかじゃないですって！
というか、僕と姫路さんじゃ釣り合わないですからね！」

いきなりのホーガンの爆弾発言に慌てながらも弁明する。

僕が姫路さんとカップルに見える分には嬉しいけど、姫路さんがそれでは嫌だろう。

それに姫路さんだって、僕とカップルなんて言われたから、傷ついてうつむいちゃったじゃないか……

「ガハハハハ、案外嬢ちゃんもまんざらじゃねぇようだぜ、なあランドルフ？」

面白そうにホーガンがランドルフに目配せをする。

「まったくですね、かしら」

二人して僕らを遊び道具にしている……

これが原因で姫路さんに嫌われたら、呪ってやるからな！

「かしら、そろそろ集会所に戻りませんと、あれが始まっちまいますよ」

「おぉ、そうだな。行くぞラブラブカップルさんよぉ」

「だからカップルじゃありませんから！」

僕は前を歩くホーガンに叫ぶ。

「ごめんね姫路さん。

僕とカップルだなんて嫌な思いさせちゃって」

「いえ、私は明久君となら……」

最後の方は消え入るような声で聞こえなかったが、優しい姫路さんの事だから、僕が傷つかないようにしてくれたのだろう。

「姫路さん行こっか？」

「行きましょ、明久君」

僕たちはホーガンを追いかけるようにして、集会所を目指した

第十六話　狂乱の都ディアーナ（後書き）

新たなエリア『狂乱の都ディアーナ』についた明久たち。
しかし、雄二たちとは離ればなれになってしまい、荒くれと親交を深めてしまった！？

果たしてどうなる！？

第十八話　囚人（前書き）

久しぶりの投稿となってしまい、すいませんでした。
新連載の『バカとテストと失われゆく記憶（ロストメモリー）』もよろしかったら見てやってください

第十八話　囚人

ホーガンに連れられてやってきた場所は大きな二階建ての建物だった。
確かに集会所と呼べるだけの広さはあるが、壁はぼろぼろだし床や天井も所々空いている。とてもじゃないが居住空間とは言えない。
それでもここには小さな子供からお年寄りまで身を寄せ合うように集まっている。

よっぽど、他の場所が酷いんだろうな……

「（姫路さん、辛いかもしれないけど誰か一人の世話を看れば次から次へとやってくるから構っちゃダメだよ）」

「（わかりました……）」

小声で話す姫路さんは凄く辛そうだ。
僕だってできれば助けてあげたいが、この数はとてもじゃないけど面倒をみきれない。
ここは心を鬼にしないといけないんだ。そう自分に言い聞かせる。

「ヨシイとヒメジはちょっくらここで待ってな」

ホーガンが比較的ましな部屋の扉を開き、招きいれる。

「ホーガンさんたちはどこに行くんですか？」

「なぁに、ちょとしたネズミが入り込んだから灸をすえにいくだけ

よ」

ネズミというのは泥棒の事だろう。
だが、この街でホーガンの物を盗もうとするやつがいるだろうか？
もしバレたら死ぬかもしれないのなんて解りきっているのに。

いや、この街の住民じゃなければホーガンがどんな人物か、ましてやそれがホーガンの物だってことすら分からないんだ！

「ホーガンさん！」

部屋から出ていこうとするホーガンを呼び止める。

「僕たちもついていっていいですか？」

「構わねぇが、ヒメジにゃぁちと辛いかもしれないぜ？」

「（姫路さん、もしかしたら捕まっているのは雄二たちかもしれないんだ）」

姫路さんに耳打ちする。

「（えっ、そうなんですか）私は大丈夫ですので連れていってください」

「ならいいがな。ついてこい！」

集会所の広いロビーにある地下へ続く階段を降りていく僕たち。
「姫路さん、足元気をつけてね」
「はっ、はい……」
地下室は明かりなどが無いため、今頼りになるのは先頭を行くホーガンの持つ松明だけだ。
この状況ではいつ足を滑らせてもおかしくない。
「着いたぜ」
先頭を歩くホーガンが向き直る。
「（姫路さんはここで待ってて）」
姫路さんに言い渡してホーガンの方へ行く。
「ホーガンさん、よかったら姫路さんに松明を貸してくれませんか？」
「この先の部屋は灯りもあるから構わねぇよ」
ホーガンから松明を借り、姫路さんに手渡す。
「（多分この先は姫路さんには辛いと思うからここで待っててね）」
姫路さんに松明を手渡そうとするが、受け取ってくれない。
「（姫路さん？）」

「（私だって行けます。前に言いましたよね？私はみんなと、明久君と対等でいたいって）」

姫路さんの言葉にはっとなる。

また僕は同じ過ちを……

「（ごめん姫路さん）」

「（明久君が謝ることなんてありませんよ。明久君が気遣ってくれたのに対して、私はわがままを言っているだけですから、私の方こそごめんなさい）」

松明に照らされながら言う姫路さんの顔はなぜだかとても頼もしく感じた。

「おーい、さっさとしないと置いてくぞ」

この声はランドルフだ。

「今行きまーす！」

姫路さんの方へ向き直る。

「姫路さん行こっか」

「そうですね」

地下室はホーガンの言っていた通り、壁に松明が掛けてあるため明るかった。

「なんでぇ、結局ヒメジは着いてきたんだな。
ガハハハッ、そんだけヨシイにご執心ってか」

「いい加減にしてくださいよホーガンさん」

いったい僕たちは何度このネタで弄られるのだろう……

「ここから出しやがれ！！」

突如地下室の奥から響いた声は雄二のものだ。
僕たちは互いに目配せをして走り出す。

「なんだ二人で愛の逃避行か？」

後ろではホーガンがまた僕たちをからかっているが、今はそれどころじゃない。

バンッ！！

勢いよく扉を開けるとそこには手枷と足枷をされているはぐれたみんながいた。
どうやら雄二以外は気絶しているみたいだ。

「みんな大丈夫！？」

「しっかりしてください！」
僕と姫路さんはみんなの方に駆け寄る。
「明久と姫路か……
悪いことは言わねえから早く逃げろ」
特に外傷の酷い雄二が力なく言う。
霧島さんの外傷が少ない事を考えると、きっと雄二が庇ったのだろう。
「なに言ってんだよ。今すぐたすk「そうはいかねぇな」
「！？」
後方から聞こえた声に振り向く。
そこにはホーガンとランドルフが入り口を塞ぐようにたっていた。
「ヨシイにヒメジ、まさかこいつらを助けようなんて思ってんじゃないだろうな？」
ホーガンが見下ろすように睨み付けてくる。
「友達を助けてなにがいけないんだ！！」
ついさっきまでは、ましな奴かと思ってたけど、この状況では僕の敵だ。
「ほぉぅ、そいつらと仲間だってか。

でもなぁ、そいつらは俺の大事な宝を盗もうとしたんだぜ？」

「だからお前の物だなんて知らなかったんだよ！
第一、大事な物なら壊れた棚の上なんかに置いとくんじゃねぇ！」

雄二が声を張り上げ抗議する。
計算高い雄二がこんな行動にでるのは違和感を感じるかもしれないが、これも霧島さんたちへの注目を少しでも自分へ向けるためのものだろう。

「ホーガンさん、どうか許してくれませんか。僕でよかったらなんでもしますので」

このままじゃ雄二がまた痛みつけられてしまうとふみ、頭を下げる。

「私もなんでもしますからお願いします！」

姫路さんも頭を下げる。

「……しょうがねぇ。
ただし、ヨシイとヒメジだけで郊外にいるアルケミーバード、さっき俺がブチのめしていたヤツだ。そいつの羽をとってくりゃぁ、そいつらと交換してやるぜ」

「わかりました。約束守ってくださいよ」

「俺は約束を守る主義よぉ」

「迷惑かけてすまないな明久……」

雄二が辛そうに呟く。

「必ずアルケミーバードの羽をとってくるから、それまで辛抱してて」

「なるべく早くとってきますから」

僕たちは地上に向けて走り出した。

第十八話　囚人（後書き）

囚われた雄二たちを助けるためアルケミーバードの羽をとりに行く明久と瑞希。
しかしアルケミーバードの羽にはある秘密が！？
次回もお楽しみに！

第十九話　錬金鳥の羽（前書き）

お気に入り登録が２０に届きました。
ご愛読ありがとうございます！

第十九話　錬金鳥の羽

雄二ＳＩＤＥ

「俺たちにチャンスを与えるとはどういう風の吹き回しだ」

俺は明久にホーガンと呼ばれていた大男を睨む。

「はぁ？てめぇ、確かユウジだったか。ユウジは助かりたくねぇのか？」

「俺が聞いてんのはそういう事じゃなくて、お前のだした条件に何かしらの裏があるのかって話だ」

そう、アルケミーバードというモンスターがどの程度の強さか分からないが、羽を持ってくるだけなら倒さずともできるのだ。

加えて姫路は回復呪文も有してるから生存率がグンと高くなる。

果たしてそんな簡単な条件で自分の宝を盗もうとした（俺たちからしたら誤解だが）やつを逃がすとは思えない。

「ガハハハ、ユウジは察しがいいなぁ。

そうよ、アルケミーバードの羽には秘密があってなぁ。それはなぁ、――――」

明久ＳＩＤＥ

僕と姫路さんは郊外の森に来てアルケミーバードを探している。
アルケミーバードの容姿はホーガンが戦っている時に見たから、見かけたらすぐにわかるはずだ。

「見つかりませんね」

姫路さんが辺りを見回しながら言う。
その片手にはアルケミーバードの羽を入れるための物なのか、薬草を入れて販売している箱の空箱を持っている。

「おかしいなぁ。街ではあんなにいたのに」

「もしかしたら、なにかの習性があるのかもしれませんよ」

「確かにそうだね」

習性といえばなんだろうか？
ホーガンと戦っていたアルケミーバードは最後の一振りで一気に全滅させられていた。
という事は全員、鉄球が届く範囲にいたということだ。
まとまって敵を狙う、すなわち集団行動で狩りをしているということだろうか？

「姫路さん、どうしたら鳥を引き寄せられるかな？」

「鳥ですか？
鳥を引き付ける方法は分かりませんが、コウモリなら棒にヒモをつけて、そのヒモに石などをくくりつければ集められますよ」

「うーん、それでも大丈夫かな？」

足元に落ちてる枝と小石を拾い、近くの木からツルを引きちぎる。
それで姫路さんが教えてくれた物を作り、回してみる。

ヒュンヒュンヒュン

「明久君見てください！」

姫路さんの示した方を見るとアルケミーバードの大群が森の奥から飛んできていた。

「姫路さん早く！」

姫路さんの手を引き、近くの茂みに隠れる。

「「「「クァクァックック」」」」

僕たちがさっきいた場所にはアルケミーバードの大群で埋め尽くされていた。

危なかった……
もし、あそこにいたら今頃は……

僕たちは息を殺し、アルケミーバードが去るのをじっと待つ。

「「「「クックックルルル！！」」」」

突然、アルケミーバードたちは奇声をあげて飛び立つ。
動物が逃げるのは自分に危機が迫っているときだ。

そして今、アルケミーバードたちが逃げ出したという事は――――

「ゴォォォォン！！」

森の奥から僕たちの６倍はあろう大蜘蛛がやって来た。
普通の蜘蛛と違い、手は鎌になっており、身体の色も紫と黒と毒々しい色だ。
更に『グリュースパイダー　ＨＰ２３００』と桁外れの数値も表示されている。

あれに見つかったら一巻の終わりだ……

音をたてないように更に息を殺す。
グリュースパイダーは辺りを２、３回見回したが、獲物がいないと判断したのか、森の奥へと消えていってしまった。
しばらくして姫路さんに目で合図をし、茂みからでる。

「怖かったですね……」

「うん、さっきのやつグリュースパイダーっていうんだけど、相当危険なやつだと思うよ」

二人してその場にへたれこむ。緊張がとけて力が入らないのだ。

「あっ明久君、右手の所にアルケミーバードの羽がありますよ」

姫路さんに言われて右手を見ると、確かにアルケミーバードの羽があった。
おそらく、グリュースパイダーから逃げる際に抜け落ちたのだろう。

「本当だね。いやぁ、戦わないで手に入るなんてラッキーって、あれ！？」

なんとアルケミーバードの羽は僕が手にとった瞬間、消えてしまったのだ。

「明久君、どこに隠したんですか！？」

姫路さんは僕が隠したものと思ってるらしい。

「僕は隠してなんかいないよ。触ったら消えちゃったんだ！」

両手を広げて、持っていないことをアピールする。

「本当ですね……
いったい、どこにいっちゃったんでしょうか？」

「うーん、やっぱり消えちゃったんじゃないかな？
それにまた探せばいいんだからさ」

「そうですね。まだ抜け落ちた羽があるかもしれませんし」

「じゃあ、姫路さんはあっちを探してみて、僕はこっちを探すからさ」

～数分後～

手分けして探してると意外に数はあった。

しかし、手をつけたらまた消えてしまうもしれないので、姫路さんの方へ向かう。
僕たちが隠れていた茂みの場所まで戻ると、姫路さんがなにやら考え事をしていた。

「姫路さんどうしたの？」

「あっ、明久君。
いえ、ちょっと考え事をしていて」

「考え事？」

「はい、アルケミーバードの羽は明久君が触ったら消えてしまいましたよね？」

「うん」

僕は相槌をうつ。

「でも地面に落ちている時にはそこにありました。
だから、消えるにはなにかに触る以外の条件があると思うんです」

「じゃあ、試しに木の棒でつついてみようか」

木の枝を拾い、側に落ちている羽をつつく。
そうすると、アルケミーバードの羽はスゥと消えてしまった。

「人以外が触ってもダメみたいですね」

「うーん、どうやって持って帰ろうか？」

二人して首をひねり考え込んでいると、すぐ近くに緑のリングが表示される。
緑はパーティープレイヤー以外のプレイヤーを示すリングだ。

「姫路さん隠れて！」

いくら非パーティープレイヤーといえども警戒にこしておくことはない。
僕は再度、姫路さんと共に茂みに隠れる。
緑のリングが近づいてくる。

誰だこいつは？

緑のリングに囲まれていたのは、刃物のような目付きに、鮮やかなオレンジの髪、黒衣のマント、腰から提げた長剣が特徴的な男だった。
当然だが、こんな身なりの人物は文月学園にはいない。
隠れていて正解だったというところだろうか。

タッ！

男が茂みの前で止まる。

「そこで何をしている？」

茂みは男の背丈よりも高いが、僕たちがいるのが見破られた。

ただ者じゃない……

武器を構え、姫路さんを後ろに庇いながら茂みから出る。

「誰だ」

「僕は吉井明久でこっちが姫路瑞希だ」

男は武器を構えていないのにまるで隙がなかった。
いやそれどころか、こちらが武器を振ろうとした時には勝負が決してるだろう。そんな威圧感さえもっていた。

「俺はゼノン、ゼノン・アキュリスだ。
もう一度聞く、ここでなにをしてた」

「アルケミーバードの羽を取りに来てたんだ」

嘘を言っても仕方ないので本当の事を話す。

「アルケミーバードの羽だと？
笑わせるな。アルケミーバードは錬金術でできた魔物だ。
そして錬金術でできた体は不安定なため、本体の生命活動が停止している時に別の生命体に触れられてしまえば消えてしまう。そんなものをどうやってとろうというんだ」

「どうしても必要なんだ。
なにか知っている事があるなら教えてほしい」

今はゼノンが敵か味方かなんて事はどうでもいい。
今、重要なのはゼノンが知っている情報をいかにして手に入れるかだ。

「なぜアルケミーバードの羽を求める？」
「大切な仲間が、友達が捕まっているんです」
姫路さんが隣に出てきて言う。
「なるほど、大方ホーガンのやつの仕業か」
「ホーガンさんを知ってるんですか！？」
「腐れ縁だ。
まあいい、ホーガンが相手なら一つ芝居でもうってやればいいだろう」
「芝居？」
「内容くらい自分で考えろ。俺はもう行くからな」
そう言うやいなや、ゼノンは颯爽と行ってしまった。
いったい、なにをしたかったんだろうか？
「ゼノンさん、ありがとうございます！」
姫路さんが大きな声で過ぎ去るゼノンに礼を言う。
「ありがとうって、なにか分かったの？」
「はい！ゼノンさんのおかげで美波ちゃんたちを助けられそうです」
嬉しそうに笑う姫路さんの笑顔は曇り一つない満面の笑みだった。

ただ、それが目の前にいる僕じゃない人物がつくった笑顔だった、
という事実が無性に納得がいかなかったんだ。

第十九話　錬金鳥の羽（後書き）

明久と瑞希の前に現れるゼノン。
そして瑞希が考えた芝居とは！？

次回もよろしくお願いいたします

第二十話　策士策に溺れる？（前書き）

瑞希の考えた策とは！？
では、本編をお楽しみください

第二十話　策士策に溺れる？

「帰ってきたか」

雄二たちがいる牢獄の前にいるホーガンが言う。

「さあ、雄二たちを解放してもらうよ」

「ガハハハハ、そんなに焦んなって。それよりちゃんと約束の物を持ってきたんだろうな？」

「あぁ、この中に入ってる」

ホーガンに木の箱を渡す。

「あぁん、この中だぁ？」

「ええ、開けて確認してくれてもいいですけど、本当にしていいんですかねぇ？」

僕は事前に姫路さんに言われた通りに喋るだけだ。

「ぐっ、てめぇ……」

「どうしたんですか？確認すればいいじゃないですか？」

なるべく挑発的に言う。

「かしら開ければいいばじゃないですか？」

「バカ言え、ランドルフ。俺たちは一杯喰わされたんだよ」

どうやらホーガンも状況が理解いったようだ。

「なんならランドルフさんが開けてもいいんですよ」

「なら遠慮なk「やめろ！！」

ランドルフが箱に手をかける寸前にホーガンが止める。

「かっ、かしら？」

「開けたらこのゲーム、俺らの負けだ」

「そんなことありませんよ、かしら。開けたらなにも入ってないかもしれないじゃないですか」

「いいや、入っていても入ってなくても俺らの負けだ」

ランドルフは未だに納得いかないというような顔をしている。

「ランドルフさん、いい事教えてあげましょうか。この中に入っているアルケミーバードの羽は姫路さんが風の呪文でつくった真空地帯に入っているんです」

「って事は……」

どうやらランドルフもやっと状況を理解できたらしい。

「そうです。箱を開けた瞬間、中は真空ではなくなり、箱に触れているあなたたちのせいでアルケミーバードの羽は消えるって事です。もちろん、消えなかったら消えなかったらで僕らの勝ちですけどね」

実際は空箱なのだが、ホーガンたちが箱を開けず中を確認することはできない。そうこの勝負、どちらに転ぼうとも僕らの勝利だ！

「ガハハハハ、俺らの完敗だな。約束通りユウジたちは解放してやるよ」

そう言ってホーガンは牢獄の鍵を僕に渡す。

「しかし、この短時間でよくアルケミーバードの羽の性質に気づけたなぁ。ヒメジの知恵か？」

「美波ちゃんたちを捕えるような人には教えたくありません！」

姫路さんは相当ご立腹のようだ。

「わりぃわりぃ、だがよぉ、俺の大切なこれを盗もうとするあいつらが悪いんだぜ？」

そう言ってホーガンがポケットから古びて半分しかないコインのような物を取り出す。

「ＶＣ！？」

古びて模様が消えかかっているが、確かにＶＣだった。ただ、なぜだか半分しかない。

「なんでぇ、ヨシイもこれがなんだか知ってんのか？」
「知ってるもなにも、僕たちはそれを探して冒険してるんですよ」
「だからユウジもこれをとろうとした訳か。まぁ、詳しい話はユウジから聞いてくれや」
ホーガンが牢獄の扉からどく。僕は鍵を開けると雄二たちに駆け寄る。
「雄二、秀吉！」
「美波ちゃん、翔子ちゃん！」
「よお、明久」
パンを食べながら雄二がこたえる。
「「えっ？」」
思わず僕と姫路さんは言葉を失ってしまう。
それもそうだろう。僕たちは雄二たちが酷い目にあっていると思っていたのに、手枷、足枷は外れてるし暢気にパンなんか食べているのだから。
「いったいこれは……」
「明久たちが出ていった後、ホーガンのやつの対応が急に変わって今はこの状況だ」

唖然とする僕に雄二がこたえる。

「牢屋にこそ入っておるが、食事は貰えるし、薬草も貰えるしでまるで対応が真逆なのじゃ」

「……私たちは平気」

「なんか心配かけちゃったみたいで悪いわね」

みんな傷一つなく元気そのものだ。

「ガハハハハ、ヨシイとヒメジの知り合いだってのにひでぇことできるかよ」

牢屋の外からホーガンが笑う。

「もう、ホーガンさんも人が悪いですよ！」

「ガハハハハ、わりぃわりぃ。まぁ、そんなことよりこれについて話をしようじゃねえか」

ＶＣを持ちながらホーガンが言う。

「そうだな。まずは俺たちの弁明といくか」

雄二が立ち上がる。

「このエリアに来た俺たちは明久と姫路のペアと俺たち四人のグループに分かれてしまった。そして俺たちが入った建物、要するにこ

こになる訳だ。ここの棚の上にそのＶＣがあったのを見つけたんだ。俺たちはそれを探して旅してるし、こんなボロい所に置いてあったから持っていっていいもんだと思い、手に取った。そしたらホーガン、あんたが帰ってきて、俺たちの話も聞かずにここにぶちこんだんだろ？」

「いやぁ、わりぃわりぃ。お前らにそんな事情があったなんて知らなかったんだ。ただ、こいつはやることはできねえな」

ホーガンがＶＣを大事そうにポケットにしまう。

「ホーガンさんお願いします。それがないと僕たちの他の仲間が助け出せないんです！」

「っつてもこれは俺にとっても……いやお前ら、この大会に出ろ」

ホーガンが壁に貼りつけてあるビラを僕に渡す。

『～王国一の猛者決定戦～
六人までのチームを組み、頂点を目指せ！
優勝者には王女から豪華商品あり』

「これに出たらＶＣをくれるんですか？」

「いいや、これにでて優勝したらだ。当然、優勝したら俺も呼べよ。それに王女はＶＣの片割れを持ってるって噂だ。悪くない話だろ？」

要するに優勝商品と交換という事か。なによりうまくいけば完全なＶＣが手に入る。
僕たちはちょうど六人だし……

一応みんなの方を見て確認をとると、みんなはうなずいた。

「いいですよ。ただ、ホーガンさんは参加しないんですか？」

「当然、俺たちも参加するぜ。まぁ、決勝であたれるように頑張ろうぜ」

「わかりました」

「ならとっとと申し込みしてきな。大会は明日だぜ」

「じゃあ、また決定戦で」

そう言い残して、僕らは集会所を後にした

第二十話　策士策に溺れる？（後書き）

無事、雄二たちを救いだした明久たち！
明久「遊ばれてた感があったけどね……」
そして次回からは武術大会！？

次回もお楽しみ！

第二十一話　開戦と攻防と譲れない想い（前書き）

連載しているバカとテストと失われゆく記憶は本編ベースなのに対して、こちらは原作にはちっともないので話構成が難しいです……

第二十一話　開戦と攻防と譲れない想い

ホーガンたちがいたスラム街から徒歩半日、そこにセウム城があった。そこで受付をすました僕たちは明日に控える大会（セウム城に着く前に日付が変わった）のために一日の休養をとり、今に至る。大会のルールは以下の通りである。

１　全６４チームのトーナメント方式で優勝を決める
２　審判が戦闘不能と見なした場合、敗者となる
３　３人が戦闘不能になる、またはチーム内に戦闘可能な人物がいない場合、敗北となる
４　試合が終わる度に体力の回復と武器の手入れが認められる
５　参加者が６４チームに満たない場合は足りないチーム分だけ魔物のチームが編成される
６　大会のフィールドにより、ＨＰは０にならないが１になる、または降伏宣言した場合は敗北となる

と、以上の６つだ。できることなら人よりも魔物と闘いたい。その方がなにも遠慮がいらないというのもあるし、なにより相手に雄二みたいな策士がいたらやりにくいし、姫路さんのようなおっとりとした人だったら闘うこと自体引き気味になってしまう。

『では、エントリーＮｏ．３７のチームとエントリーＮｏ．３８のチームは試合会場においでください』

控え室に呼び出しのアナウンスが響く。僕たちはＮｏ．３８なのでこの試合にでなければならない。

「いくぞ！」

雄二の掛け声をうけ、みんなが試合会場に向かう。出口が近づくにつれて歓声が大きくなっていく。

きっと姫路さんはこういうのは苦手だと思い、隣を歩く姫路さんに目を向けると、意外にも姫路さんはやる気のようだった。これは僕も負けていられないな

「よお、久しぶりだな」

会場に出るなり、聞き覚えのある声が聞こえる。日の光が眩しくてよく見えないが、この声は間違いなくブラを頭に被った変態（夏川）先輩のものだ。

「こんなところであうなんて奇遇だな、先輩」

「ったく、夏期講習受けてただけでこんな訳のわからない所にとばされて来ちまったが、お前らと会えて嬉しいぜ」

「そりゃぁ、こっちも同じだな。なんせ」

「「お前らを徹底的にボコせるからな」」

雄二と変態先輩の声が被る。そういえばモヒカン先輩がさっきから静かだと思い、目を向けると秀吉に熱い視線を送っていた……

「両者はなにかの因縁があるらしいですが、そろそろ試合が始まりますので開始位置に着いてください」

審判にさとされて二人はそれぞれチーム内に戻る。

「では、第1回戦の出場者は前に」

「俺がいく」

「こっちは俺だ」

試合リングに上がり、再びにらみ合う両者。

「試合開始！」

NOSIDE

先手をとったのは雄二だった。

「くらいやがれ！」

夏川に肉薄し、拳を振りかざす。しかし夏川はそれを左手に持った盾で防ぐ。

「はんっ、そんなへなちょこな攻撃が効くかよ！」

夏川は右手に持った剣で雄二を払う。しかし、それも雄二の腕に着けている籠手に阻まれる。

「先輩こそ、随分と優しい攻撃をしてくれるんですね」

「なめやがって！」
頭に血がのぼった夏川は籠手に防がれないように剣を大きく振りかぶる。しかしそれは守りも手薄になるということだ。
「歯ぁくいしばれやぁぁぁ！！」
夏川の剣が雄二に届くよりも前に雄二の拳が夏川のみぞおちにはいる。守りの手薄になっていた夏川はそのまま大きく体勢を崩し、倒れてしまう。
「どうした先輩、その程度か？」
「調子にのんなよ！」
雄二の挑発に夏川は立ち上がり、突っ込んでくる。だが、攻撃力に重点をおいた攻撃は隙があり当たりにくい。事実、雄二は余裕の表情で攻撃をかわし続けている。
「夏川、冷静になれ！」
「そっ、そうだな」
外野（常村）の指摘により、平常心を取り戻す夏川。
「へへっ、次は逃がさねえぜ！」
「上等だ！」
ぶつかり合う両者。それは互いの狙いを同じにした一撃必殺の攻撃。

「くらいやがれ、岩砕劉破（がんさいりゅうは）！！」

「くたばれ、鉱翔牙（こうしょうが）！！」

拳は相手の脇腹をとらえ、剣は相手の肩をとらえる。拳の起こした衝撃により砂ぼこりが舞う。それが晴れた時に立っていたのは――――

「やるじゃねえか先輩……」

「てめぇこそな坂本……」

同時に倒れる二人。

「Ｎｏ．３７ＶＳＮｏ．３８の第一回戦は引き分けとなります！」

審判の判決が宣告され、両者は救護班により運ばれていく。両チームは傷ついた仲間の心配をするが、大会をスムーズに進めるために、試合中に席を外すことはできないのだ。

「次の方は前に」

「じゃあ次は僕がいくよ」

「吉井のやつがいくなら俺がいくぜ」

明久と常村が前にでる。

「第二回戦、試合開始！」

審判の掛け声により試合がはじまる。常村の装備は槍に鎖かたびらと全体的に軽装であり、撹乱して闘う明久とは速さの勝負となるだろう。

「先輩、先にどうぞ」

「先手を譲った事を後悔させてやるぜ」

常村が明久に近づき、槍の先端がギリギリ届く範囲で振り上げる。明久はそこから一歩引き、槍の攻撃範囲から逃げる。いや、逃げたつもりだった。

「甘めぇぜ吉井！」

常村は振り上げた槍を突進の体勢に戻すと、そのまま突っ込んできた。突然の事に対応できなかった明久はそれをそのまま受けてしまう。

「おらおら！！」

明久の体勢が崩れたのを狙い、常村の怒涛の連撃が明久を襲う。明久は反撃にうつれずに、防戦一方だ。

「これで終わりだぜ、鎖斬槍（さざんそう）！」

常村の鋭い突きが明久を一閃する。その攻撃は明久の防御を貫通し、明久はその場に倒れ込む。

「だだいまの勝負、Ｎｏ．３７の常村選手の勝利！」

審判の判定がくだされ、明久は救護班に運ばれていく。

「ははっ、結局一発もくらわなかったぜ。かっこつけて先手譲ったりするからこうなるんだ」

勝ち誇ったように言う常村に瑞希たちは歯をくいしばる。ここで乱闘となれば失格となり、明久や雄二に合わせる顔がない。その気持ちが彼女たちを踏みとどませていた。それを知ってか知らずか、常村は更に悪口を続ける。

「ったく、吉井も坂本もでしゃばりやがって邪魔なんだよ。成績だって底辺で素行だって悪いし、問題ばかりおこすし本当にクズだな」

「そんな言い方しなくてもいいじゃないですか！」

瑞希が声を張り上げ叫ぶ。

「そんなって事実だろ？お前らもつるむ仲間は選んだ方がいいぜ？」

「そうですね！私もあなたのような表面でしか人を見れないような人と一緒にいる人の気がしれませんから！」

「姫路の言う通りじゃ。わしらからしてみれば、お主らの方がよっぽど迷惑極まりないのじゃ！」

（ガーン……秀吉にあんな事言われちまった……）

「そうよ、アキや坂本にだっていいところはいっぱいあるんだから！」

「先輩たちみたいな人たちにとやかく言われたくない」
秀吉、美波、翔子の三人も瑞希に加勢するように言い放つ。
「この女ども、好き放題言いやがって……」
下を向きながらプルプルと震える常村。
「上等だ！かかってきやがれ！！」
怒りの沸点に達した常村は大声で叫ぶ。瑞希はそれに物怖じもせずに前に踏みでる。
「姫路よファイトじゃ！」
「……瑞希、任せた」
「瑞希、あいつに本当に大切なものはなにか教えてやりなさい」
三人の声援を背に瑞希は大剣を構える。本来、彼女は中継タイプのため、1対1の勝負は不利となる。しかし、それを差し置いてでも彼女の中で譲れないものがあったのだ。
「では、第三回戦を始めます。試合開始！」

第二十一話　開戦と攻防と譲れない想い（後書き）

もう後がない瑞希たち。
常村の心ない言葉に怒りをあらわにする瑞希。果たしてどうなる！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2988t/

バカとゲームと召喚獣

2011年7月28日10時28分発行